

たわしの読書メモ・・・ブログ 738 [廣松ノートⅡ— (5)]

・廣松渉『増補マルクス主義の成立過程』至誠堂 1984(上)

廣松さんの「マルクス主義」の「三部作」の一冊目です。この本は増補版で、初版は1968年に出版された最初の単著とのこと(『著作集』の解説・解題)、実は成稿は『エンゲルス論』が先になっていたとのこと、『マルクス主義の地平』『マルクス主義の理路』と続くのですが、後の二冊は、廣松理論の成立過程とも言える、廣松さんの理論生成過程ともいえるべき論攷で、この本は、マルクスが青年ヘーゲル派との論争過程から、マルクスがエンゲルスと共に、青年ヘーゲル派からその論争の只中から自らの思想を成立させていった過程を描いている書で、そういう意味では、『エンゲルス論』『青年マルクス論』『マルクスの思想圏』との親和性の方が強いかもしれません。こちらの学習は、第三次学習で(それまでわたしが生きていれば、頭が動いていればの話ですが)展開する予定です。只、廣松理論がマルクスの文献学的研究から、理論形成していったということを押さえるならば、やはり三部作の最初に取り上げることだと、わたしはここに位置づけています。

ところで、この著の初版の中でも『ドイツ・イデオロギー』の編輯について」があり、更に増補版で、『ド・イデ』に関する論攷を三つ入れています。廣松さんは、『ド・イデ』の編集というところで名を馳せたひとで、しかもエンゲルス主導説を展開したのです。この論文集でも「初期エンゲルスの思想形成」他があり、エンゲルスが草稿を書き、それにマルクスがコメントして、更にエンゲルスがそれにコメントと自己校正もしていくという形で、『ド・イデ』の基底稿たる「I、フォイエルバッハ」の草稿が成立していったこと、初期において、エンゲルスが経済学への誘い、共産主義論への誘い、運動的な処への誘い、また、分業論の展開(但し、これは問題含みのようです)など、エンゲルス先導説が廣松初期マルクス・エンゲルス関係のとらえ返しの理論の核心になっています。その他、ヘスの影響ということ、とりわけ協働論や、シュタイナーの国家＝幻想共同体論の先駆的なこと、まさにマルクス理論の青年ヘーゲル派内の論争から出てきている理論、これをどう現在のにとらえるかの問題等、青年ヘーゲル派の読み込みに、わたしを誘うのですが、とても、かなえそうにありません。

さて、廣松さんは、運動と理論的なことを同時に展開しつつ、理論の基礎的なところから押さえ直す作業の必要性を感じ、マルクスの文献学的研究から、自らの理論をアカデミックに展開していったのです。そして、廣松物象化論、廣松共同主観性論、廣松四肢構造論、廣松役割論など、独自の理論を打ち立てたのです。日本語という世界的な議論としてはマイナーな言語で、マルクス研究の世界的波及ということでは壁があるのですが、それでも例えばアジアにおいては中国語訳が出てくるなど、世界的に評価されるひとなのです。『ド・イデ』の訳について、廣松訳批判が出ています。確かに、批判が当たることがあり、『ド・イデ』の岩波文庫版で、廣松さんの没後の出版になっていますから、補訳者の小林昌人さんが、その批判を取り込んで、補正していたりします。ですが、そもそも、訓詁の学ではないところでの、マルクス／エンゲルスの理論をどうとらえ、現在のどう

活かしていくのかというところで、廣松訳の限界は歴史的制約性の類いのことです。

そんなことより、わたしはそもそも基礎学習が成っていない、もはやそこから始め得る歳ではないので、あくまで、運動のための理論として、廣松理論を追っかけています。ですから、細かいマルクスの文献学的研究には踏み込まず、大雑把につかんだところで、ここでは、疎外論から物象化論へと転回する廣松理論を押さえるところで、この読書メモも、大枠を押さえるところでの簡単なメモ取りになってしまうことを、「内心忸怩たる思いを懷いて」います。なお、余りにも膨大になったので、(上)(下) 2回に分けました。

まずは、目次から。

目 次

選書版への序文

旧版への序文

初期マルクス像の批判的再構成

補遺 ヴィルヘルム・シュルツの歴史・社会観

マルクス主義と自己疎外論

初期エンゲルスの思想形成

補遺 いわゆる“口実筆記説”に寄せて

【附】 エンゲルスの再評価のために

『ドイツ・イデオロギー』の編輯について

——東ドイツ新版の出現を機に

『ドイツ・イデオロギー』編輯の問題点

【附】Ⅰ『ドイツ・イデオロギー』ソ連新版について

【附】Ⅱ『ドイツ・イデオロギー』新版が投じた東ドイツ哲学界の新しい波紋

『ドイツ・イデオロギー』の文献学的諸問題

——新MEGA(試行)版に寄せて——

『ドイツ・イデオロギー』研究の現段階

——手稿復元(河出書房)版を編んで——

【附】『ドイツ・イデオロギー』手稿復元版を編んで

弁証法の唯物論的顛倒はいかにして可能であったか

選書版へのあとがき

大枠は冒頭に書いたもので、いきなり、各論稿ごとの切り抜きメモに入ります。

初期マルクス像の批判的再構成

「……『経哲手稿』と『フォイエルバッハに関するテーゼ』を経て『ドイツ・イデオロギー』の間によこたわる深淵なるギャップであって、移行過程の内的必然性、そこにおける連続性と不連続性が画定されておらず、従ってマルクスの思想像を有機的全体として再構成することに成功していないことの謂いである。／従来の研究がこのギャップを

埋めることのできなかった最大の原因は、当時のマルクスが“大先輩”モーゼス・ヘス——傍系のヘーゲル左派で『ライン新聞』の大立物——の圧倒的な影響下にあったことを、無視ないしは過小に評価してきたことにある。……」2P

「……このヘーゲル左派の展開過程は、決してフョイエルバッハの中間遁駅とする単線的なものではない。そこにはヘーゲル左派自体の内部における三つの流れとその綜合が介在する。第一のシュトラウス、バウエル、フョイエルバッハと流れる宗教批判の系列(これはさらに中期バウエルとその一派によって継続される)、第二にチェスコウスキー、ヘスへ流れるヘーゲル歴史哲学批判の系譜、第三にルーゲを経てマルクスへ連なるヘーゲル法哲学批判の系譜である。図式的に言えば、マルクス主義は——但し、経済学の体系を措きうる限りで——これら三つの流れを綜合・止揚することによって成立しえたのであった。」6P

一 ヘーゲル左派の三極化と『ライン新聞』の時代

二 ヘーゲル法哲学との対決と『独仏年誌』の時代

三 歴史哲学批判の系譜との交流と『経哲手稿』

「……少なくとも政治・社会問題に関する発想と視角は、ヘーゲル法哲学の延長線上にあった。パリにおける経済学研究の開始も——エンゲルスの触発とみる通説は必ずしも当っておらず——ヘーゲル法哲学の或る所説に触発されたものと考えられる。ところが『経哲手稿』に至ると、そこにはヘーゲル歴史哲学批判の系譜との“交流”もみられ、ヘーゲル法哲学の大枠を遙かに超出しはじめる。／マルクスのこの飛躍は、モーゼス・ヘスの影響をぬきにしては考えられない。嘗つて『ライン新聞』の時代にはマルクスはヘスを敬遠したのであったが、彼自身の思想形成の進捗につれて、今やヘスに倣いうる条件が成立していた。①マルクスは既に四四年の初頭までに、ヘーゲルにおける主語と述語との顛倒というフョイエルバッハの指摘に共鳴して、それまでのバウエルの従って「自己意識」と読みかえて糊塗してきた「絶対精神」を人間に置換すべきことを感ずるに至っていた。②但し、この人間はアトム的諸個人ではなく、「共同体存在」ともいうべき“ドイツ的”人間であり——この「人間」の頹落(たいらく)形態たる市民的アトム化を止揚して「人間」を即自対自的に実現すること、これをマルクスは「人間的解放」と呼んだのであって——、それはフョイエルバッハの「類的存在」に近い。だがマルクスは、この類的存在の本質的性格を「愛」に局限することはなかったし、折しも開始していた古典経済学の研究と相俟ち、社会的労働の主体としての人間把握と二重写しにするメンタリティーにあった。／しかるに、フョイエルバッハの類的存在をまさしくこのように改釈し、この主体概念に拠って自己疎外と回復の過程としての人間史を描き出し、社会・経済・革命の問題を論じてたのが、当時パリに在って『独仏年誌』に協力していたモーゼス・ヘスにはほかならなかった。」28-9P・・・廣松さんは物象化論を押さえたところで、単なる「顛倒」ではなく、ヘーゲルの実体主義的疎外概念自体を批判するに至ります。

「モーゼス・ヘスは——ルーゲ・マルクスが法哲学のシェーマを継承したのに対して——

ヘーゲル歴史哲学を換骨して共産主義を立てたということができる。」 30P

「これを批判的に継承して、自由実現の行為を現実の人間の業となし、かつは自由の現実態をゲルマン国家に代えてフーリエの社会主義的未来像に托したチェスコウスキーを承けて、ヘスは更に一步を推し進めたのであった。」 30P

「「行為の哲学」は、ヘスの場合、固有の主体概念に俟つ。彼はデカルト以来のコギトーに代えて、人間を自己活動 *Selbsttat, Selbstbetätigung* の主体として捉え、しかもこの人間を本源的に社会的な存在として捉える。ここにおいて人間の本質は協働 *Zusammenwirken* にあるとされる。「この協働こそが個人の現実的本質である。……思惟やや行動も専ら協働が生ずる。……《精神》という神秘的な名で呼ばれているところのものも……この協働にほかならない。協働がはじめて生産力を現実化する、云々」(Ib.330f.Vgl.S.210.228.S.275.S.287)。ヘスは、人間を単なる類的存在、単なる共同体をなす存在 *Gemeinwesen* ではなく、協働をなす存在、協働存在として規定し、社会的な仕方
で労働する存在というこの主体概念のもとで、彼のいう「自由」の概念、その真の実現としての共産主義、これを実現するための現実的・歴史的諸条件、遡っては社会経済のメカニズム、等々を説くのである。」 31-2P・・・ヘスからの「協働」「共産主義」概念

「マルクスはフォイエルバッハをヘス式に改竄するとはいえ、『経哲手稿』ではまだ、いわばフォイエルバッハとヘスとの中間の立場にあったということができる。それは究極的にいえば、主体概念の設定の仕方に懸っている。……………」 36P

四 エンゲルスとの再会と新しい世界観への途

「……………しかるに今や『経哲手稿』以来の主体概念そのものが、従ってまた疎外の論理そのものが、バウエル派の思弁的構成の秘密の暴露に伴って、もはや *problematisch* になったのである。この自己批判的省察の第一歩が、早くも『フォイエルバッハに関するテーゼ』で踏み出される。」 44-5P

「『フォイエルバッハに関するテーゼ』は四五年の春、ブリュッセル——マルクスは『フォルヴェルツ』紙に関係した廉で前年の末パリを追われてここに移住していた——で書かれたものと推定される。この有名な覚書きは、エンゲルスの影響もさることながら、ヘスの影響をぬきにしては考えられない。一言で性格づけるならば、この十一項からなるテーゼは、マルクスが“フォイエルバッハとヘスとのいわば中間の立場”から、ほぼ完全にヘスの立場に移行したことを告げる文書である。」 45P

「顧れば、ヘーゲル左派の三極的分解の兆しが生じた頃、バウエル派の穏健な一員として出発したマルクスは、むしろ右寄りの批判を契機としてルーゲの陣営に移り、ヘーゲル法哲学との対決を通じて「市民社会から国家へ」のシェーマを換骨し、真の人間共同体としての共産主義への志向を固めたのであった。次いで、この共同社会の否定の否定としての実現を、自己疎外と回復の論理によって弁証法的に展開する姿勢をみせ、歴史哲学的なパースペクティヴを確保しつつ、いわゆる三つの源泉の総合的統一の途に就くことができた。この過程を通じて、彼はバウエル派とルーゲ派とをともに超えることができたとはいえ、

やがてフォイエルバッハ・ヘスの主体概念——従ってまたこの主体概念に俟つ限りでの自己疎外の論理——のもつ難点に気づき、一旦ヘスの立場へ純化・徹底することになった。」 48-9P

「四五年春、“亡命地”ブリュッセルで相会したヘス、マルクス、エンゲルスは、翌る四六年かけて、『ドイツ・イデオロギー』を共同執筆することになった。この共同作業の過程、それが当時二十七歳のマルクスにとって、ヘーゲル左派の三極を端的に総合・止揚しつつ、ヘスの思想的立場と水準から脱却する「自己了解」の過程となった。」 49P

補遺 ヴィルヘルム・シュルツの歴史・社会観

「ところがコルニューによれば、シュルツは同書の初めの方で、唯物史観に極めて近い思想を打出していた様子である。……」 50P

マルクス主義と自己疎外論

(一)

「……いやしくも「マルクス主義と自己疎外論」を論じようとする限り、しかも「自己疎外」に原理的な意義をもたせようとする限り、少なくとも差当っては、ヘーゲルの乃至ヘーゲル学派的な語義において、すなわち、マルクスが踏襲している語義において、それを問題にすべきであろう。／元来、自己疎外ということは、特別な主体概念と不可分である。周知の通り、ヘーゲルにおいては、彼のいわゆる「精神」がかかる主体概念であった。ヘーゲル左派においては、それが改釈乃至転置されて、シュトラウスの「人類」(Menschheit=人間性)、バウエル兄弟の「自己意識」(Selbstbewußtsein)、そしてフォイエルバッハの「人間なるもの」(Der Mensch)、更には「類的存在」(Gattungswesen)となった。かかる主体が、自己を自己に対して疎ましい他在として対立せしめ(sich selbst entremden)、自己自身を外在化せしめ(sich ent-äußern)、対象として現前せしめる(vergegenständlichen)。かくの如き主体のありかた——それを傍観している哲学者にとっては(für uns)主体が自己性を失っているわけではないにしても、当の主体としては自らのその「他在」(Anderssender Äußere)となっており、そのうえ、この「他者」によって規制されているようなありかた——これが「自己疎外」「外化」「対象化」である。それ故、自己自身を疎外する主体をぬきにしては、「自己疎外」ということは意味をなさないのである。／ところで、このような自己疎外とそれからの回復——ヘーゲルの用語法でいえば「獲得」(Aneignung)の歩み行きが、彼の哲学の、わけても『精神現象学』の基本シェーマになっていたこと、これは周知の通りである。……」 56-7P

(二)

「……ヘーゲル主義を換骨奪胎せる自己疎外論を媒辞とすることによって、「ドイツ古典哲学」を止揚しつつ、古典派経済学と先行社会主義とを相互媒介的に定礎し、揚棄する途が拓けたのである。まさしく初期マルクスの自己疎外論は、それをまっぴらして「三つの源泉」が媒介的統一にもたらされ、よって初めてマルクス主義の生誕をかのうならしめた当のものである。」 62P

(三)

「ところが、マルクスはその後二年を待たずして、自己疎外という概念と訣別するに至った。彼は人間の自己疎外という——『経済学と哲学とに関する手稿』当時における如き——発想そのものを超克するに至ったのである。」 62P

(四)

「結論から先に云えば、自己疎外論超克の必然性は、なによりもかの主体概念に根ざすものである。上述の通り、自己疎外論は或る特有な主体概念をまっではじめて存立しうるものであるが、マルクス・エンゲルスは、自己疎外論がよってもって成立しうる如き主体概念一般を、端的に克服していた。このことによって、自己疎外論はもはや維持されがたいものとなったのである。」 66P

「・・・・・・「人間の本質は、個々の個人に<共通に>内在する抽象的一般者(Abstraktum)ではない、人間の本質(人間という存在者)は、社会的関係の総体(Ensemble)である」(テーゼ六前半)。マルクスは「類的存在」として人間というフォイエールバッハ的主体概念からの脱却と相即的に(テーゼ六後半)かくの如き新たな主体概念を採るに到ったのである。」 67P・・・？主体概念=実体主義自体の止揚

「・・・・・・「分業に下属」せる個人、「社会的諸関係の総体」としての人間存在は、そのような自己疎外過程の主体一般とみなされることはできない。・・・・・・或いは論理的にはむしろ、資本や賃労働の定在をまっではじめて、プロレタリアという規定をもった主体となるのである。一般化していえば、人間の本質を社会的諸関係として把える以上、かかる人間は、第一次的には歴史の能産的主体ではなくして所産的主体である。・・・・・・」 68-9P・・・分業の止揚の必要性・必然性

「ヘーゲルにおいてそうであったように、歴史性と論理性とは本源的に相即しなければならぬ。しかるに上向法においては、それは「ça dépend (それは場合による)である」(経済学批判序説)。マルクスの立場からすれば、メトドロギッシュ(methodo 方法論上)にも『経済学と哲学とに関する手稿』におけるが如き自己疎外論は採ることが出来ないのである。」 70-1P

(五)

「・・・・・・アトムとして、自由な存在として「契約的」社会関係に入り込むブルジョア・イデオロギーの描く個人とは反対に、マルクスにあっては、人間はその本質において「社会的諸関係の総体」として把握されているのである。ここには、人間観における決定的な転換が存する。この点を看過し、ひそかにブルジョア的人間観を前提しているのみか、更には、マルクス・エンゲルスによって超克された「人間解放論」、ひいては同じく止揚されたヒューニズムに通ずる限りにおいて、よしんば常識的な自己疎外論であっても肯んじ難いのである。」 73P

(六)

「しかし、後期マルクスの立場を扮するならば、恐らく次のように云うことができよう。

実存主義における主体はまさしく「純粹の・真実の・個人」乃至は、「聖マックス」の謂う「自我＝唯一者」にほかならず、デカルト的自我の最期の変形である。しかるに、デカルト的自我は前項にいう「常識的人間観」の哲学的表現である。この意味において、実存主義的人間把握は現代云々という掛声にも拘らず、未だに近世的である。しかるにマルクス主義は、デカルト的学統の近世的ブルジョア的人間観を超克したことによって成り立ったものである。こう考えてくると、いわゆる旧来のマル存主義は、マルクス主義からの後退でなくして何であろうか。それはマルクス主義を「継承的に発展」するどころか、戯画化するものである。」 76P

「・・・・・・・・そもそも論者達のいう聊か珍奇なザインとゾレンとの分裂が、なぜ生ずるのかを考えてみるがよい。問題を単なる論理的包摂関係に還元してしまわない限り、それは結局のところ、階級社会においては望むべくもない超階級的普遍妥当性を求めることに因る。「分業に下属」せる人間の立場に立つ限り、それぞれの埒内においては、「階級的意識(知識)は本源的にソクラテスの知である」以上、「ザインとゾレンのとの分裂」はそもそも存立しない。・・・・・・・・」 77P

初期エンゲルスの思想形成

【附】 エンゲルスの再評価のために

廣松さんのカテゴリー的標題の頁にある解題的文の指示に従って 【附】 エンゲルスの再評価のために」から入ります。

「第一に再評価すべきことは、マルクスの思想形成期にエンゲルスの及ぼした積極的な影響である。従来の研究では「マルクスに経済学研究の決意を固めさせた」という一点だけが強調されているが、私の考えではこの点についてはむしろ割引く必要がある。今日、特に評価すべきことは、モーゼス・ヘスおよびフョイエルバッハの影響からマルクスを解放した点である。／・・・・・・・・／より重視さるべきエンゲルスの影響は、ヘスとの関係においてである。近年に至るまで一般には留意されていないが、四四年から四五年春にかけての時点では、マルクスは大先輩モーゼス・ヘスの圧倒的影響下にあった。・・・・・・・・／この状態からマルクスを脱却させ、いわゆるマルクス主義の方向に促したものの、それは同じくヘスの“門下”として出発しながら、いちはやくヘスを乗り越えていたエンゲルスとの書簡のやりとりと本式の協働作業であった。マルクス主義の成立にとって決定的な意義をもつ契機として、この点をあらためて評価すべきであろう。」 120-1P

「第二に、右にいう協働作業にも関わる点であるが、共産主義理論と唯物史観とに関して少なくとも当初のあいだ、マルクスを先導した功績を評価しなければならない。四五年の後半から翌年にかけてブリュッセルで共同執筆された『ドイツ・イデオロギー』は、俗に「唯物史観誕生の書」と呼ばれている通り、マルクス主義の成立にとって劃期的な論稿であるが、その白眉たる「第一篇、フョイエルバッハ、唯物論的な観方と観念論的な観方との対立」の原稿は、エンゲルスの書き下ろしたものにマルクスが加筆修正を施したもので

あって、手稿を文献学的に検討し兩人の文章を比較検討した結果、この遺稿で確立された新思想は、エンゲルスの方が主導・先導したという認定を生ずるに至った。」122P

「第三に挙げなければならないことは、マルクスを実践運動に引き入れ、マルクス主義を「共産主義者同盟」公認の理論として定着させた功績である。……／……／一方のマルクスは、伝記家たちが切磋琢磨(やくわん)するほど「政治家としては……」であったことを思うにつけ、これまで高く評価されてきた「祖述家・伝導家」としての役割という以上に、「将軍」の異名をとった辣腕のオルガナイザー、エンゲルスの納めた“戦果”をもう一度見直す必要があろう。」122-3P

「第四に、近来悪罵の的になっている“自然弁証法”の再検討が問題になる。遺稿『自然弁証法』は前後二十年にわたって書きつけられたものであり、その間に幾度か構想の変更を蒙った未定稿であるが、不幸にも、人々は従来“ロシア・マルクス主義”の枠にあてはめてこの遺稿を抜き読みしてきた。現行の諸版では——なるほど素材そのものを初めて公表した一九二五版に較べて整理されてはいるが——エンゲルスが自ら自覚した筈の凄惨な破綻とそれにもとづく著述計画の変更が、編輯の不手際(?)のために覆いかくされている。エンゲルスの自然弁証法を論ずるためには、当該遺稿の整理と再考証、ひいては編輯の手直しから始めねばならない。その暁には意想外の光が投ぜられる筈である。」123P・・・これに関しては、わたし自身の反差別論の立場から、そして、新メガにおける研究から、エンゲルスが晩期マルクスの思想(それは「マルクス主義者は差別の問題をとらえ返せていない」という批判において、それを乗り越えるような兆しがでていたこと)についていっていないという批判が出てくるに及び、そしてマルクス・レーニン主義ということが、ヘーゲルに先祖返りしたエンゲルスの思想において、実はエンゲルス・レーニン主義とも言えるような内容になっていて、そのあたりのとらえ返しが必要になっているともとらえています。

ここから、附録的文から主文に戻ります。なお、節的な漢数字の後の斜文字は、わたしが学習ノートのつけた標題です。

「結論の一端を先取りしていえば、われわれは通説とは反対に「唯物史観およびそれと相即する共産主義理論の確立に際して第一ヴァイオリンをひいた」のは、合奏の初期に関する限り、むしろエンゲルスであることを確認せざるをえない。」81P

(一)エンゲルスの共産主義者としての定立

「エンゲルスは、一八四三年、彼が二十二歳の頃には、はっきりと共産主義に賛成の立場をとっており、一廉の共産主義者として発言している。一方、二歳年長のマルクスは、四四年の或る次期、見方によっては四五年にいたるまで、共産主義に対して懐疑的な態度をとっており、エンゲルスの早熟ぶりには瞠目すべきものがある。……」82P

「……それでは一体どういう経緯からこのような立場と結論に到ったのであろうか？ ヘーゲル左派としての自己展開に立入る前に、ここでは取敢えず外面的な事情と他

の共産主義潮流との関係に触れておこう。／第一に考えられるのは、モーゼス・ヘスの影響である。．．．．．／第二に考えられる外的な事情は、当時上げ潮に乗っていたチャーチスト達との接触である。．．．．．／第三の外的要因は、当時“階級闘争のショーウィンドー”であった英国に在住し、穀物法をめぐる赤裸々な争いを目撃したことである。．．．．．」 83P

(二)『国民経済学批判大綱』と『カーライル論』

『独仏年誌』に掲載された『国民経済学批判大綱』は、マルクスによって「天才的な小論」と評価され、「マルクスに経済学研究の決意を固めさせた」(レーニン)ばかりではなく、兩人を結びつける機縁となった論文である。この論文は単なる学としてのエコノミーに対する批判ではなく、同時にナチオナルエコノミーそのものに対する批判であって、おのずから彼の共産主義理論の背景を窺わせるものとなっている。」 86-7P

「ここにおいてエンゲルスは「類意識のない細分されたアトムとしてではなく、人間として意識的に生産せよ、そうすればこれらすべての人為的な維持しがたい対立を克服」できる(Ebenda (同じ箇所))ことを教え、今やそのような共同的、意識的な生産・配分の社会、一言でいえば「自由の王国」を実現しうべき時点に近づいていることを指摘する。『国民経済学批判大綱』では、このように、必然の王国から自由の王国へ、その可能性と必然性という視角から共産主義に基礎づけが与えられている。」 89P

「このような水準に達しておりながらも、エンゲルスはまだヘーゲル左派の残滓を払拭していたわけではなかった。そしてそのことがエンゲルス特有の仕方で経済学と共産主義とを結合しえた背景にもなっている。その間の事情は『独仏年誌』のもう一つの論文『カーライル論』から窺うことができる。／「カーライルの立場は——とエンゲルスはいう——ドイツ的汎神論の考え方である」．．．．．このように「内的・宗教的側面」の土俵においてはエンゲルスはまだバウエルやフォイエルバッハの立場に立っている。」 89-90P

「エンゲルスは．．．．．人間が類としての本質を喪失している状態という意味で非人間的な状態と観ずる。彼が『国民経済学批判大綱』で指摘したとき、「孤立したアトムの諸個人」が“無政府的”に競合しあっている状態こそが、まさしく“類的存在”たる人間が「類を喪失」した状態にほかならない。ここにおいて「本質」を回復することこそがゾレンとして設定される。．．．．．そのような社会体制として共産主義社会が存立する。かくして、一言でいえば、ヘーゲル左派の志向した人間の本質の回復は、共産主義的“人倫的生活共同体”という形においてのみ実現される。このような順路において、エンゲルスは共産主義を、人間の本質の“宗教的疎外”からの回復を追求してきたヘーゲル左派哲学の必然的帰結だと云うのであろう。」 90-1P．．．「本質」という概念自体の止揚の必要

(三)マルクスとの接触

「．．．．．エンゲルスはヘーゲル的な「疎外の論理」そのものを卸ける。それというのも、エンゲルスはフォイエルバッハの「人間」をシュティルナーの方向に、つまり類的

存在を自立的な主体にするのとは逆方向に、具体的・経験的な諸個人にほぐしていく方向にいちはやく向かっていたからである。／そもそも前節でみた通り、社会の状態をかなり適確に経済学的・具体的にとらえ、共有制をもとにして社会を再組織すべきことを知ったエンゲルスにとっては、人間本質の自己疎外と回復という哲学的・抽象的なシェーマに押し込めて立論することは、余り必要でなくなっており、社会学的な説明こそが、課題となっていたのである。」 92-3P

「ともあれ「疎外の論理」に拠る「思弁的構成の秘密」を自覚的に批判したこと、これがヘーゲル左派を「ドイツ・イデオロギー」として卻け、ヘーゲル左派を脱却するための動索となった。・・・・・・」 94P

「・・・・・・マルクスが仕上げ中であった『神聖家族』(刊行は翌年二月)では、バウエルの「自己意識」に対してフォイエルバッハの「人間」が対置されており、また「唯心論と唯物論の対立がフォイエルバッハによって克服された」(MEGA 1. Abt. 3 Bd. S. 266)と主張されている。しかるにエンゲルスは、いち早くフォイエルバッハ批判と相即的に、唯物論の立場を標榜するに至ったのである。／しかも、それは、先の引用文から知られる通り、ヘーゲル学派的な思弁的構成とは逆に、個別から普遍を導出する唯名論的・経験論的立場と吻合する。・・・・・・」 94-5P

覚え書き 註(5)ロッツェに言及

(四)『ドイツ・イデオロギー』の編輯と執筆期の兩人の関係

「この第一篇の原稿は、(1)大小二つの束からなる。(2)そのうち大きい束は Urtext (原本)である。しかもそれは、第二篇「聖ブルーノ」第三編「聖マックス」といった篇別構成が確立する以前の龐大な原稿から撰り残されたものである。(3)このウアテキスト執筆者はエンゲルスであり、極めて多くの抹殺・修正・加筆がおこなわれている。(4)そのうえマルクスによる補筆・修正・欄外書込も相当の量にのぼる。／エンゲルスの文章とマルクスの修正・加筆した文章とを比較してみると、兩人の見解にはまだ相当の距たりが見られる。ありていに云えば、マルクスの方がいかに甚だしく立遅れていたか、また唯物史観は主として専らエンゲルスの創見によるものであってマルクスはむしろエンゲルスに学んだということ、これが判る。」 97-8P

『ドイツ・イデオロギー』では、共産主義論が主題的に展開されているわけではないが、エンゲルスの手稿には当然それに関わる論点が含まれている。共産主義革命と従来の革命との根本的相違の解明。プロレタリアートが先ず国家権力を掌握し自らを一旦支配階級に高めるべきことについての国家の本質規定にもとづいた説明。被支配階級が旧い垢を淨め新世界の建設能力を身につけるためにも革命の鉄火が必要だという議論、その他論点は多岐に亙るが、(イ)共産主義社会が、単なる財産の共有制にもとづく社会としてではなく、固定化された分業のない社会として描かれていること(手稿一七頁)および、(ロ)後年のキャッチフレーズで云えば、必然の王国に対する「自由の王国」として立論されていること(手稿一八、五五―五九頁)、この二点が特に注目される。」 98P

「・・・・・・・・ともあれ、先に引用したマルクスの書込み(「共産主義はわれわれにとって
は、打建てられるべき或る状態(社会体制)ではなく、・・・・・・・・」)は、その当座のマル
クスが、まだ共産主義という打建てらるべき社会体制、窮極的な社会体制としての共産主
義を考えていなかったということを証明している。」99P・・・わたしの『ド・イデ』読書
メモの修正の必要

「かくして『ドイツ・イデオロギー』執筆時の或る時点まで、共産主義論に関してマルク
スとエンゲルスとの間には見解の相違が存続してたこと、少なくともこの面ではエンゲル
スの方が前進していたこと、これは否めないところである。・・・・・・・・」100P

(五)エンゲルスの唯物史観・共産主義論

「エンゲルスがイデオロギーと呼ぶのは——マルクスの補筆・修正と対照するとき、マル
クスの語法とは必ずしも一致しない——歴史的諸形象をイデーの Inkarnation(化肉)、
Verwirklichung(現実化)として考える発想の謂いである。従って、それは彼のいうイデア
リスムスの歴史哲学版とも云え、このかぎりでは彼は idealistisch という言葉と ideologisch
という言葉とを屢々混用している。彼のいうイデアリスムスは、ヘーゲル哲学が典型をな
すように広義の自然全般をイデーの Verwirklichung、イデーの Abbild(模像)として、遡っ
ては“精神”の自己疎外態として把える立場を指し、イデオロギーとは、狭義の自然に関
してはその Ursprünglichkeit (根源性)を承認しつつも、こと歴史の方面に関してはイデー
の Verwirklichung を立論し、ヘーゲルの“精神”の残映たる「自己意識」「人間」といっ
た“実体化された主体”の自己疎外過程として歴史を考えて行く発想の謂いである。／こ
こにおいて、エンゲルスのイデオロギー批判は、歴史を「人間の自己疎外と回復の過程」
として把える発想に対するに帰着する。かかるイデオロギー批判を展開するためには、狭
義の自然と同様、歴史的象が自体的に存在性をもち、歴史的イデーに先立ってそれ自身
の自然史的法則をもつことを解明しなければならない。この作業を、エンゲルスは、「自
然をも非有機的肢体とする」ごとき「人間」「類的存在」とは対蹠(たいせき)的な「飲みか
つ食わねばならぬ有体的(「ライブハフト」のルビ)な諸個人」から出発し、分業を分化の
原理としながら遂行する。それを通じて、トータルな歴史把握を提示するにとどまらず、
彼は何故また如何にしてイデオロギー的顛倒が生ずるかを説明してみせるのである。／こ
こでは行論を辿る余裕を欠くが、次の事実を指摘することによって、彼の到達した思想水
準をとその内容とを端的に示唆することができよう。それは、後年のマルクスがいわゆる
“唯物史観の公式”として定式化した諸論点が、いずれもほぼ完全な形でエンゲルスのウ
アテクストのうちに現われているという事実である。・・・この後詳しい説明・・・」

101-2P

「・・・・・・・・ここでは右に紹介した事実——これによって、エンゲルスの到達した思想
水準とその内容の大略は察知されるであろう——に関連して次の二点だけを取り上げてお
こう。／その一つは出発点と展開の原理に関わる。エンゲルスは「有体的な諸個人」とい
う出発点から社会関係を立論する際、かなり強引な議論を進めている。彼は下層という端

初的な社会関係と男女間の分業を立論し、且つは「家族のうちに潜在的に存在する奴隷制」(手稿一七、六八頁)を媒介項として財産、ひいては「市民社会」に説き及んでいく、さなきだに分業という概念を階級すら分業の下に包摂されるほど広義に用い、この「分業」を行論に槓杆にしている。・・・次の段落でこのエンゲルスの論攷へのマルクスとの対比もでていますが、エンゲルスの分業論は差別ということと相即的にとらえるわたしの観点からして、階級も分業の下に包摂するとう観点には、わたしも共鳴するのですが、「家族のうちに潜在的に存在する奴隷制」という立論は、性差ということを差別の根源におく、物象化に陥っているととらえられます。この後に出てくるマルクスや廣松さんは、分業の起源を共同体間の交換というところにおいてとらえていたことに照らして、このエンゲルスの立論が、フェミニストから批判されている『家族・私有財産・国家の起源』にまで及んでいるかの検証が必要になります。／このような筋立てに対してマルクスが積極的に賛成だったのかどうか、手稿への書込からは何とも云えない。しかし、(イ)『経哲手稿』や『神聖家族』での議論は措くとしても、(ロ)今問題にしている共同作業の直後に書かれたアネンコフ宛の手紙や『哲学の貧困』にはそのような姿勢がみられないこと、(ハ)『経済学批判要綱』の時点ですら **Stammwesen**(種族存在)として改訳しつつ **Gattungwesen**(類的存在)から出発しており、(ニ)その後においても、分業の端初を共同体間分業に求め、これを介して私有財産制と階級分化の歴史的成立を説く姿勢をもっていること——しかるにエンゲルスの方はその後も「内因論」の姿勢を崩していない——。これらの事情を思い併せるとき、果してマルクスが賛成であったかは多分に疑問の余地がある。しかしともあれ、諸個人から出発し、内的分業を槓杆にすることによってのみ『ドイツ・イデオロギー』での唯物史観がはじめて可能になっていること——唯物史観の **Autorschaft** (作者)にも関わる問題として——この点には飽くまで留意すべきであろう。・・・分業に留目したこと自体の評価として／もう一つ取上げておきたいのは、自己疎外論をめぐってである。マルクスは、手稿の初めに近い個所に、「哲学者たちに判る言葉でいえばこのような『自己疎外』は」云々という加筆をおこなっているが、エンゲルスは説明の便法として疎外という言葉を用いない。彼が用いているのは唯一ヶ所である。その個所たるや、ウアテキストの事実上の結論部に相当し、イデオロギー的顛倒がいかんにして生ずるかを論決する条りである。」103-4P・・・その条りはこの後に掲載されています。

「ここで附記したいのは、第二篇「聖ブルーノ」以下の原稿には——それは明らかにマルクスの補筆を経て清書たれたものであるが——共産主義を単なる「運動」としてではなく、まさしく「打建てらるべき社会状態」として立論した個所が幾個所も存在するという事実である。前節で指摘した「見解の相違」に鑑みると、この点に関してはエンゲルスがマルクスを説得したものと考えざるをえない。」105P

(六)マルクスを実践的活動に誘う

「共産主義理論に関してマルクスを説得(?)したエンゲルスは、彼がバルメンで開始していた実戦運動の方面でもマルクスを僚友にした。四六年の五月『H・クリーゲに反対する

回状』を契機にマルクスも初めて実践運動への姿勢を示しはじめ(？時期が三ヶ月遡るという「選書版あとがき」にて指摘)、エンゲルスと共に「共産主義通信委員会」の仕事を進める。／唯物史観の確立によって、①必然の王国の成立と存立の歴史的必然性、②それが共産主義に取って代られる現実的諸条件と必然性、これを社会科学的に説明し、四三年以来の提題に「科学的な」基礎づけを与えするに至ったエンゲルスは、ドイツ革命のプログラムを建て直す。それまでのエンゲルスは、ドイツが英仏に比べて一段階前の社会構成体にあることを認識していなかったため、ドイツ革命も直接に共産革命たりうると考えていた。しかるに今や、来るべきドイツ革命はブルジョア革命であることを知った。・・・・・・」 106P

「イギリス支部と通ずる傍ら、パリ支部を「寝返らすことに成功」していたエンゲルスは四七年夏、義人同盟の大会にパリ支部を代表して出席し、同盟の組織化、ワイトリング主義からの脱却と「共産主義者同盟」への改称をかりとり、同年十一月の大会には綱領改正案『共産主義の原理』を帯同し、マルクスと共に綱領の起草を一任される。」 107P

「その際、経済学研究の先鞭をつけたという点は措くとして、共産主義理論と唯物史観とのいずれの方面においても、エンゲルスの方が先行しかつ主導したということをわれわれは認めなければならない。」 108P

「・・・・・・二つの独創的な知性が全く同じ音色を奏でるということはおよそありえないことであって、現に弁証法についての考えかた、上部構造と下部構造との相互作用、ひいては決定論・非決定論の問題、さらには人間論の翳りなどの点で——彼ら自身は殆んど自覚していなかったにせよ——今日のわれわれの眼からみれば、単にニュアンスの差といっただけでは片づかないものが残るように思われる。これら可成り重要な論点での案外の相違をも勘案しつつ、マルクス主義を全体として周到に理解するためには、兩人の思想形成過程の経緯と「持分」とを一旦ほぐしてみる作業が是非とも必要な筈である。このささやかな小稿がそのための捨石となりうれば倖である。」 109P

補遺 いわゆる“口実筆記説”に寄せて

「・・・・・・われわれは、前もって話合ったものを云々というマイヤーの説、口述筆記云々というリャザノフの説、そして、口述筆記とはいかぬまでもマルクスのメモをもとにしたのではないかという可能的な第三の説、これらを同時に射程に収めながら検覈することにしよう。／最終的には思想内容そのものと兩人がそれまで辿ってきた思想形成の経過から論ずべきであるが、——拙著『エンゲルス論』参照——差当り、エンゲルス筆跡の旧層の文章とマルクスの追補した文章を比較してみると次のことが判る。／(ここから段が下がっています)(一)『プロレタリアートに関するテーゼ』や『経哲手稿』の立論となる文章が、たしかにこの未定稿にも再現しているが、それらはすべて——敢て唯一つの例外もなく云おう——、マルクス自身があとから追補したものであって、エンゲルスの地の文にはみられないこと。／(二)若干の基礎的なターム、例えば、「イデオロギー」という言葉の用法が兩人の間で異なること、また例えば「自然的」*naturwüchsig* といった、特殊な意味で

用いられている或る種の言葉が混在しないこと(つまり、それまでの一方だけが用いていたタームはこの遺稿でも一方だけが用いていること)、右の事実は措くとしても、生産力という基本的概念——従ってそれは頻々と用いられているのだが——を表わすのに、マルクスは一貫して *Produktivkraft* とその複数形 *Produktivkräfte* を用いているのに対して、エンゲルスは最旧層では必ず *Produktionskraft* とその複数形 *Produktionskräfte* を用いていること。(註)／(三)これは兩人の文章の比較というよりも、むしろもっぱらエンゲルスの *Urtext* にかかわることであるが、マルクスの修正、エンゲルス自身による加筆を除去して原型にもどしてみると、行論が整理されておらず、思い付くままに書きなぐったという観が深い。(旧来の版本で「歴史」という標題のついていた個所、すなわち、唯物史観の前提を定立し、歴史の基本的な四つの契機を打出している個所などを想起されたい！ 実は、それでさえ加筆修正され、“改善”されている)。(ここで段下げが終わっています)／手稿における兩人の思想的な喰違いを詳細に指摘するまでもなく、右の三つの事実だけを以ってしても、すでに件の諸説を卸けるに十分であろう。口述筆記やメモによる記述であれば、(一)(二)の現象は生じえまい。(三)の事実は、リャザノフには恐らく口述筆記の印象を与えたであろうが、論点も整理せずに口述するとは！ 何と失礼な所業ではないか！ われわれは(一)(二)の事実と併せることによって、(三)の事実自体、予備的な討論も、況やメモもないままに、一気呵成に書き下ろされたことの一証左とみる。……」 115-6P

(註) この「生産力」のドイツ語用語のマルクスとエンゲルスの違いの廣松さんの指摘は、『著作集第八巻』でのこの『マルクス主義の成立過程』の当該の箇所で「編者註」がついていて、その後の新たな補正的なことも書かれています。ただ、語法の違いから、口述筆記説批判に活かす、という主旨には変更はないとは言え得ると思えます。

『ドイツ・イデオロギー』の編輯について

——東ドイツ新版の出現を機に

「若き日のマルクス・エンゲルスが J・ワイデマイヤーと 大先輩 のモーゼス・ヘスの協力を得て書き遺した(四人の共同執筆)『ドイツ・イデオロギー』は、原稿がほぼ完成された時点で出版契約が破棄されたまま八十余年も埋もれてきたが、この遺稿は、マルクス・エンゲルスが、先輩ヘスの“エピゴーネン”として出発しつつ、彼を次第に乗り越えて、唯物史観を確立した記念碑的な文書である。ところが一九三二年、スターリン時代にはじめて“公表”されたこの遺稿の底本 MEGA.1.Abt.5.Bd.は、手稿を甚しく誣いるものであって、局限すれば“偽書に等しいもの”になり了っていた。この事実は、一部識者の間では夙に知られていた筈であるが、スターリン時代の終熄十年にして昨今ようやく手稿の原型を回復する運びとなってきた。／一九六五年のソ連版に続いて、さらに改善を加えたドイツ語版が一九六六年の秋、東ドイツで発表された。これら二つの新版は、成程、「旧版を典拠とした従来のマルクス《解釈》を根底から覆す」ものではある。しかしながら、筆者のみるところ、これらの新版は依然として「遺稿の資料的価値を事実上、無に帰するほどの重大な欠陥」を免れていない。そしてはやくも、この欠陥が陥穽となって、誤ったマル

クス《新解釈》が横行の兆しをみせている。／筆者は、偶々『ドイツ・イデオロギー』旧版の“編輯”に疑問を懷き、手稿復元の手だてがあることを知って“自家用版”を準備し、筆者なりの復元・編輯案を提唱してきたが(本書所収「『ドイツ・イデオロギー』編輯の問題点」、以下「旧稿」と略記)、その後、上記のソ連版が発表された関係もあり、ドイツ語版新版の一新を待つ心境に変わっていた。しかるに前記の始末である。ここに再び『ドイツ・イデオロギー』編輯の問題点について卑見を述べ、新版の批判に即して代案を提出することにしたい。」126P

一 編輯を必要とする理由

『ドイツ・イデオロギー』の遺稿は、二巻本用六篇(見方によっては七篇)の草稿から成っている。その第一篇が「一、フォイエルバッハ、唯物論的な観方と観念論的な観方との対立」である。この第一篇は——逐条的な批判を内実とする他の諸篇とは異って——原著者たちがここで積極的に自説を展開しており、歴大な遺稿の白眉ともいべき部分である。ところが、晩年のエンゲルスも確認している通り、肝腎なこの篇は未定稿のままである。このため、他の五篇の清書稿とは異って、特に第一篇の処理が問題になる。諸版の異同を生ずるのも専らこの篇に関してである。／・・・・・・・・問題の草稿は、一続きの書き下ろしではなく、／(1)審級のいくつかの層から成り、その一部は下書き・異稿・改訂稿・浄書稿といった内的対応関係をもっており、しかもここには『ドイツ・イデオロギー』全六篇の最旧層と最新層との両限が含まれている。／(2)当時まだ思想形成の途上にあった二人の著者の合作であり——この篇に関してM・ヘスは、直接には手を貸していない——、しかも兩人の意見がまだ完全には一致しておらず、基本執筆者エンゲルスの文章に、マルクスが抹殺・修正・加筆を施しており、それをさらにエンゲルスが補修している。のみならず、多くの欄外書込みや符牒があり、改稿のためのメモもついている。／(3)元来は別々のコンテキストで書かれた断案から成るとはいえ、補筆・修正を注意ぶかく追跡してみると、手稿の各断簡が有機的な構成分に変えられており、適当に配列・按分してみれば、断片の集塊から一転して、草稿の全体がほぼ纏まったかたちに構造化される。／このような特殊条件をもっているために、編輯の仕方如何では、(イ)雑然たる断片——しかも相当量の欠損・散佚(さんいつ)があると見らるべき断簡の集積にもなれば、(ロ)ほぼ纏まりのある——しかも“欠損部”を改訂新稿で埋められた有機的な全体にもなり、そのうえ、(ハ)各種符牒を手掛りにして“予定されていた組替え”を施すべきではないかという問題すら生ずる。という次第で、手稿を片端から活字に移すだけでは済まない。／だがまさしく上の(1)(2)(3)故に、もし編輯が正鵠(せいこく)を得るならば、①新旧層を比較対照し、且つは補修・推敲を追跡することによって、思想形成の進行状況、唯物史観の確立過程を追認することができ、②誰のいかなる語句や文章を誰がどう修正しているか、兩人のうち一方だけに固有な着眼と発想は何か、これを知ることによって兩人各々の果たした役割と持分をクロージアップできる。また、③当時における唯物史観の構想を窺うと同時に『ドイツ・イデオロギー』を転換点とする自己疎外論の遷移を全体的な構想との関連で知ることができ

る。」 127-8P

「ここで、両新版に対する批判の論点を前以って掲げておけば、新版は右の①②③を保証せぬどころか、再び覆いかくす編輯に終わっている。——遡っていえば、前掲(1)(2)(3)の特異性に由来する格別な資料価値を台無しにして、再び誤ったオリエンティールングを必然化する結果に終わっていること、この一言に括ることができる。」 129P

二 草稿の外観・層別・組成

三 旧版と両新版との異同

「・・・・・・この版(アドラツキー版)の原版では、本文でこそ推敲された最後の文形での素材がつぎはぎされているが、本文には採録されなかった字句、つまり抹殺された字句や修正された元の字句、ならびにまた、欄外書込み、符号、割線、補筆・修正の筆蹟、等々、およそ手稿に見出される一切の事実が、脚註や巻末の **Textvarianten** などて詳密に報告されている。(この限りにおいて、アドラツキー原版——流布版はしからず——では、手稿の各頁を復元するための手掛りが与えられていた。この原版には手稿の写真版も数葉添えられている。筆者が手稿の各頁を表象しえたのは、リヤザノフ原版とこのアドラツキー原版との詳密な記載に拠ってであった。)」 134P

四 両新版の不備と欠陥

「・・・・・・ここではまず、一見“些末”な不備によって、新版では『ドイツ・イデオロギー』の特殊格別な資料価値が全く失われて了っていることを指摘しておきたい。／・・・・・・／第一に、唯物史観の確立過程を知りうべき折角の資料価値が失われている。原著者たちがまさしくこの手稿を通じて唯物史観を確立したという特殊事情から、もとの文章、修正の過程、最終の文案、この三つを知ることによって、唯物史観の確立過程を追認することができる。そのためには、数次に亘って、かも可成りの時間を隔てて(?)おこなわれた補筆・修正に関しての、精緻な記載が不可欠である(*)。／(小さなポイントでの段落下げの註)*・・・・・・手稿の旧層には、その直前に発表されたヘスの或る論文と瓜二つの条りさえ見出される。ともあれ協働 **Zusammenwirken**, 交通 **Verkehr**, 生産力 **Produktionskraft**, といったヘスの概念と発想に拠った地の文に、分業の概念を持込み、ヘスのいう「協働関係」を補修しつつ、交通関係、ひいては生産関係といった概念に至り、これをヘス以来の生産力概念と関係づけ、さらには下部構造・上部構造の発想を根づかせていく。——このような過程が、手稿への手入りを跡づけることによって可成り鮮明に浮かびあがる。この間の事情を分析し、ヘスの果した媒介的役割という論点をも射程に収め、唯物史観の確立過程を追跡するためには、加筆修正された最後の文形を掲げるだけの新版ではものの役には立たない。／第二に、マルクスとエンゲルスの各々の“持分”を明別しうべき格別な資料価値が失われていること。エンゲルスの地の文、マルクスの修正、エンゲルスの再修正、これらを比較することによって、この手稿は兩人各々の貢献を知るための恰好な資料となる筈であるが、新版ではその別が殆んど報告されていない。エンゲルスが折角に用いた「生産関係」を消して「交通形態」にしたのは一体誰か、エンゲルス

の展開した共産主義社会論をマルクスがいかに転覆しているか、疎外論に対する態度の相違とやがての一致、イデオロギーという言葉の用法の相違、等々、重要な手掛りが新版ではつかめない。あまつさえ、手稿に見出される特殊マルクスの諸提題は、彼自身による事後的挿入であることの報告を欠くことによって、新版は旧態依然として“口述筆記”説の妄言に途を残している。／第三に、草稿全体を構成し、その内的聯関を研究するための手掛りが全く奪われていること。・・・この後、*具体的例示*・・・」137-9P

五 草稿の内部構成の認定

「十全な考証を割愛するのほかなかったことは遺憾であるが、筆者はここで再び、前掲の配列を執り、かつ手稿に見出される一切の事実を精緻に記載報告することによってこの手稿の特殊格別な資料的価値を完全に発揚せしむべき(註1)新編輯を提案して止まない。／かくのごとき一見些末なテキストクリティークによって、唯物史観の確立過程にいかなる光が投ぜられ、またこの史観の全体像がいかに変貌するか、これは続稿の問題とならねばならない。／(小さなポイントでの段落下げの註)(1)・・・『経哲手稿』当時のマルクスは、ヘスの“エピゴーネ”だとはいっても、まだフォイエルバッハとヘスの中間の立場にあり、翌年の春(つまり『ドイツ・イデオロギー』の執筆の年)『フォイエルバッハに関するテーゼ』ではじめてほぼヘスの立場からフォイエルバッハを批判するところまでできた。一方エンゲルスは二年以前からヘスよりも左寄りの立場に立ってはいたが、本文中でも指摘した通り、旧層ではまだ多分にヘス的な議論から出発している。／・・・・・・／・・・・・・従来研究者たちが意識的に(?)無視してきた一八六八年に“唯物史観の根本に関わる点で生じた”マルクスとエンゲルスとの“一寸した意見の対立”の素地が、すでに『ドイツ・イデオロギー』の時点から胚胎していたことが判る。」145-6P・・・この最後の指摘を検証することー

『ドイツ・イデオロギー』編輯の問題点

「現行版『ドイツ・イデオロギー』は事実上偽書に等しい。・・・・・・」148P

「この間の事情を識るためには、予め二つの神話を払拭しておかねばならない。／(1)原稿は未完成であったこと。・・・・・・／(2)執筆者は主としてエンゲルスであること。・・・・・・」148P

「リヤザノフとアドラツキー版の編輯者P・ウェラーとは、編集方針の点では正反対の態度をとっておりながら、実は共通の認識に立脚している。それは現存の原稿では、「第一篇、フォイエルバッハ、唯物論的な観方と観念論的観方との対立」が形をなさないという判断である。ここから、リヤザノフはもっぱら素材の紹介をむねとし、ウェラーはこの素材をもとにして、換骨奪胎的な再構成に腐心することになった。／ところが、吾々の見るところでは、現存する原稿だけで一応のまとまりをもっている。・・・・・・」150P

「・・・・・・人はまず、マルクスが加筆修正の途次で原稿に附けなおした頁番号の順に草稿を配列し、頁づけのとんでいる幾つかの個所に“小さい束”に見出される改訂浄書稿を按分すればよい。このような至って簡単な手続きによって、改訂さるべき個所を内部に

含むとはいえ原稿は一応のまとまりをみせる。／もとより、事はそれほど単純ではない。右の点を立証し、第三の編輯を提案しえんがためには、文献学的な研究を必要とする。吾々はまず、(一)利用しうる資料を確認し草稿の状態を概観したうえで、(二)アドラツキー版への批判、(三)リヤザノフ版への言及を経たのち、(四)新しい編輯案の大綱を提出するであろう。」151P

「・・・・・・・・新しい編輯というよりもそれに並行する文献学的な検討を通じて、／第一に、唯物史観の形成過程と最初の展開が明晰に浮かびあがること、／第二に、『経哲手稿』での自己疎外論が、どのようにして止揚されるに至ったかが明確になること、／第三に、唯物史観の形成に対するエンゲルスの参与が、どの程度であり、そこにおけるエンゲルスのオリジナリティがどの点にあるかが明瞭になること、／以上の三点は敢て記しておきたい。原稿版ではこれら三点が完全に覆いかくされてしまう。この一事に鑑みても現行版は批判を免れないであろう。特に第三の点は、旧来の通説を覆すほどの重みを持っており、ことによれば「唯物史観の創始者はマルクスというよりもむしろエンゲルスである」という嘗つて一部識者の間で囁かれていた噂話——晩年のエンゲルスが骨折って打消した“史実”——を金文字で綴り直すことになるかもしれない・・・・・・・・」152P

一 資料の確認と草稿の概観

「(1)尤も、両版の間では字句や句読点の判別しかたに関して若干の相違がある。この点については、原稿そのものを見ない限り最終的な判定は不可能であるが、本稿での討究範囲ではこのような細かい点は決定的な意味をもつまい。」154P・・・この「細かい点」を新MEGA版の『ドイツ・イデオロギー』が出た際に、原稿そのものの写真版があるアムステルダムまで行き、「原稿そのもの」の写真版を点検し、それを元に廣松版の批判として渋谷版が出ています。それを、岩波文庫版の廣松訳・編の岩波文庫版で補訳者の小林昌人さんが、取り込んでいます。なぜか、渋谷さんは「討究範囲」という観点がないのか？その後の廣松理論の展開を見れば、判ると思うのですが。

二 アドラツキー版の検討

三 リヤザノフ版の問題点

四 新しい編輯のために

「・・・・・・・・この客観的事実としての“疎外”がなぜ起こるかを問題にし、「一言でいえば分業」を以って答えている。」187P

【附】Ⅰ『ドイツ・イデオロギー』ソ連新版について

【附】Ⅱ『ドイツ・イデオロギー』新版が投じた東ドイツ哲学界の新しい波紋

「従来の“正当派”マルクス主義の体系では、弁証法的唯物論(これに模写説的認識論も含まれる)という第一哲学を歴史の領域に適用したものとして史的唯物論を位置づける傾きがあった。これに対してザイデルは、史的唯物論——厳密にはその中心カテゴリー——を体系の中核におくべきことを主張する。／「実践というカテゴリーは、普通にそう解釈されているように単に史的唯物論の中枢点に位するのではなく、まさしくそこに位するが故に、

マルクス主義哲学の全般の中心カテゴリーなのである」。唯物論の歴史・社会への“適用”に先立って、“物質と意識”との本源的な関係ならびに自然一般の普遍的法則として叙述されるがごとき弁証法的唯物論においては、人間の実践——これは本源的に歴史的・社会的な性格規定をもつものであって、動物の条件反射の運動とは質的に区別される！——はその座を占めることができない。／旧来の弁証法的唯物論では、まさしくマルクスのテーゼがいう通り、対象は専ら「客体ないし直観の形式においてのみ」とらえられ、人間的活動・実践としてはとらえられない仕儀に陥っている。そして、認識の歴史的・社会的被制約性の認識論的構造が不明のままに終っている。旧来の“体系”では弁証法的唯物論と史的唯物論とを真に統一することができない。自然的・社会的環境世界に対する人間の実践的関わり——この唯物史観の基本的視座を出発点とすることによってのみ、体系的整合性もはじめて保証される。」 202P

「少なくともデカルトのコギトー以来、哲学体系の出発点の問題が思想家を動かしてきた」。スピノザは「実体」を体系の基礎におき「世界の多様」を演繹した。これと対蹠的に「フィヒテは自己意識の活動、自我の事行を出発点にした」。ヘーゲルはスピノザの実体とフィヒテ的自己意識の媒介的統一を「精神の活動」のうちに求めたが「問題を解決することができなかった」。マルクスの実践概念こそ、ザイデルよれば、まさしくこの問題を解決するものである。／ともあれ、マルクス主義哲学がスピノザの実体主義とフィヒテ的自己意識主義との止揚に立脚することは『神聖家族』の有名な条りからしても明らかである。しかるに「マルクス主義哲学(特にプレハーノフから出発する)の多くの叙述は、スピノザ主義の影響を受けている」。「マルクス主義哲学の歴史にスピノザの及ぼした影響の批判的な分析はまだおこなわれていない」。ザイデルはこう述べて「スピノザ主義的実体、つまり“人間から引き離して形而上学的に改作した自然”を体系の出発点にする」ロシア・マルクス主義哲学に対する決定的な批判を暗示して憚らない。／「マルクス主義実践概念」から出発するとき、フランス唯物論に弁証法の形骸を接ぎ木した「俗流唯物弁証法」の転覆だけでは済まない。／人間が実践的に関わり合う環境(自然的・社会的)は、諸個人にとってこそ原的に与えられる所与であるが、歴史的・社会的にみれば人間の実践によって変様されたもの乃至は形成されたものである。『ドイツ・イデオロギー』を援用していえば、人間をとりまく「感性的世界は産業と社会状態の産物」であり、外的自然の先在性は疑いえないが、しかし「そもそも人間の歴史に先行する自然なるものは、新生の珊瑚礁上の自然ならいざ知らず、今日ではもはや存在しない」。人間から引き離された自然は人間にとって「一つの単なる抽象」たるにすぎない。「われわれ人間の実践的・理論的活動によって対象がわれわれにとっての対象(Gegenstand für uns)となるまでは——とザイデルはいう——それに先立って、対象のそれ自体としての存在(An-sich-sein 即自存在)について原理上何ごとも立言できない」。／この見地を貫くとき、レーニン哲学にいう「物質」はそれこそ「一つの単なる抽象」にすぎぬ「即自存在」として排去さるべきものとなり、この即自存在に関わるレーニン流の模写説もまた維持されがたいものとなることは見易い

ところである。／それどころではない、ザイデル論文は、即自存在に立言することを自ら禁じてフェノメナリスティックな視界にとどまりつつ、しかもフェノメナルな世界の全体を「感性的・対象的活動」による被媒介性において——カント的構成ではないが、歴史的・社会的人間活動の“構成”の所産として——把える立場(『ドイツ・イデオロギー』には一つの姿勢としてたしかにこれが存在する)、このような立場をインプリシットに措定している。／東独哲学界の新しい動きは、一言でいえば、“ロシア・マルクス主義哲学”の全面的な止揚にとどまらず、従来「即自存在」の法則として立言されてきた自然弁証法、ひいては唯物弁証法そのものを解消して、唯物史観の視座のもとに世界の全体を体系化する一種の歴史的構成主義とでもいうべき方向を指向している、ということができるであろう。わたしの見るところ、ザイデル論文には『ドイツ・イデオロギー』新版の依然たる欠陥に禍いされた一面があり、そのことに負うてまた『経哲手稿』との接続を強行していること(これ自体東独では新奇であるが)、等々、マルクス解釈の次元では若干の異論なきをえない。しかし解釈ではなく体系的な展開こそが問題であるかぎりでは、以上の簡単な紹介とコメントからしても、ザイデルの巻頭論文が象徴する東独哲学界の動きには留意を促すに足るものがあるだろう。」203-4P・・・廣松さんのレーニン批判で、それにもかかわらず革命的実践においてマルクス・レーニン主義に陥っているのであろうか？

『ドイツ・イデオロギー』の文献学的諸問題

——新MEGA(試行)版に寄せて——

これの旧稿は前章であり、この原稿は、新MEGA(試行)版へのコメントと旧稿の再論になっています。アカデミックな論稿になっていて、運動論的なところから押さえる作業をしているわたしとしては読み流してしまいました。

一 新MEGA(試行)版の内容と問題点(斜体文字はわたしが付けた標題—以下同じ)

二 新MEGA(試行)版『ドイツ・イデオロギー』に関しての問題点

「……………しかし、ともあれ新MEGA(試行版)で一応の見当をつけて、アムステルダム詣でをするという道があるのであるから、これは特質しておくに値すると思う。」221P・・・廣松さんも『ドイツ・イデオロギー』の編輯問題だけに特化するならば、アムステルダム詣でをするという道(渋谷さんが採った道)を採ったのかもしれないのです。

三 廣松編輯案と河出書房版の特質と『ドイツ・イデオロギー』全体の構成

「バガトゥーリアおよび新MEGA試行版の編輯者は、ヴィーガンツ社刊の季刊誌の第三号に接したことが『ドイツ・イデオロギー』執筆の直接的な機縁であったと推定している。ここであらかじめ念頭におくべきことは、前年すなわち、一八四四年の秋時点に、マックス・シュティルナーの『唯一者とその所有』が公刊され、一八四五年の二月にはマルクス・エンゲルスの共著『神聖家族』(つまり、バウエル派を批判した労作)が刊行されていること、そして、五月にはエンゲルスの大著『英国における労働者階級の状態』、六月には、ヘスの『最後の哲学者たち』(つまり、バウエル、シュティルナー、フォイエルバッハの三人を批判した小冊子)が刊行されていること、さらにはヴィーガンツ社の季刊誌の第

二号には、フォイエルバッハの『『唯一者とその所有』との関連における『キリスト教の本質』』（つまり、シュティルナーの批判に対する反批判）が出ていることである。まさしくこのような三つ巴、四つ巴の論争状態にふさわしく、ヴィーガント社の季刊誌の第三号には、バウエルの論文とシュティルナーの論文とが載っている。バウエルは、フォイエルバッハの性格づけをおこない、その“亜流たるマルクス・エンゲルス”の『神聖家族』に反批判し、ヘスの『最後の哲学者たち』にも反批判している。シュティルナーは、これまた、前号に載ったフォイエルバッハの論文に反批判し、ヘスの『最後の哲学者たち』にも反批判している。このヴィーガント社の季刊誌の第三号を読んで、当時親密な間柄にあり、“亡命地”ブリッセルで、文字通り軒を並べて住んでいたマルクス・エンゲルス・ヘスの三人が反批判を決意したという次第なのである。」239-40P・・・『ドイツ・イデオロギー』執筆の直接的機縁

四 第一篇「フォイエルバッハ」の原稿の性格と成層に関する分析的検討

「・・・・・・現存する第一篇の大きな束は、エンゲルスが後年、マンチェスター時代を回顧して次のように書いていることを髣髴(ほうふつ)たらしめる。「私がまざまざとみせつけられたものは——経済的事実は、これまでの歴史的記述では全然なんらの役割も演じていないか、せいぜいのところ、とるにたりない役割しか演じていないが——経済的諸事実こそが、すくなくとも近代世界では決定的な歴史的力だということ、この経済的諸事実が今日の階級対立の生ずる基盤であり、大工業のおかげで階級対立が十分に発達した国々、したがってわけでもイギリスでは、この階級対立がこれはこれでまた、政党の形成の、党派闘争の、従ってまた、全政治史の基盤をなしているということである、云々」・・・・・・」256P・・・エンゲルス発の唯物史観という廣松さんの論拠

「・・・・・・基底稿と改訂稿とを対照し、両者のあいだに矛盾や不協和がみられる場合には、改訂稿に即して理解すべきであって、同じく遺存するとはいっても、そのような個所では、旧層の主張は是正されたものと了解すべきであること、これは言わずと知れたことの筈である。しかるに、旧来は、とにかく、矛盾や不協和を解消すべく、無理に第三の折衷的な線で改釈してはいなかったか？ また、手稿の文章は、往々、余りにも添削されすぎているため、しかも、相異なる時点で二度・三度と修正されたため、文法的に崩れてしまっている場合が少くない。辛うじて文法的には体をなしてはいても、文意が多義的に解釈できるようになっている個所が非常に多い。そのような個所では、添削過程を参照することなしには、とうてい正しい解説は不可能である。しかるに、旧来は、もっぱら最終の文形だけによったため、その範囲ではなるほど文法的・語学的にそう読めても、時として実質的には見当違いな読み方をしてはいなかったか？ これは、決して筆者独りの杞憂ではあるまい。が、既に多くを語りすぎたことかと惧れる。」265-6P・・・廣松さんが『ドイツ・イデオロギー』の編輯問題に拘る注意点

『ドイツ・イデオロギー』研究の現段階

——手稿復元(河出書房)版を編んで——

一 河出書房版の意義

「・・・・・・・・私にいわせれば、これまでの各版の編輯者たちは、第一篇の手稿がもっている内的な構造・連関を見落しており、その結果として、編集的配列の面でも不備を生じている。この点をも是正する必要があるということで、私としては——先ほど申した意味での準写真版方式の手稿復元だけでなく新しい編輯的配列をも試みた次第なのです。」

271P

二 手稿復元版の特徴

「・・・・・・・・底本ということでは、四つに限ることができます。第一は、一九二六年に『ド・イデ』第一篇の部分の手稿を初めて活字化して紹介したリヤザノフ版。・・・・・・・・／第二は、一九三二年に旧メガ第五巻として出たアドラツキー版で、・・・・・・・・／第三は、一九六六年に出た東独版で、これは前年に出たバガトゥーリヤのソ連新版と同種のもので、・・・・・・・・／第四は、いよいよ来年(一九七五年)から二十五年がかりで出る予定の新メガ、これの試行版として一九七二年に出たものですが、これには抹殺部分や修正過程なども巻末附録の形で報告されております。全集ということになるとこういう方式を採らざるをえないのかもしれませんが、この巻末附録というのがまるでクイズみたいな標記方式になっている本文(これは最終文形のみを印刷)と巻末附録を丹念に読み比べながらクイズを解いていけば、添削過程を追認できるとはいえ、実用生という点ではどうでしょうか。抹殺・修正、加筆、添削の過程が一目でパッと判るという具合にはなっていないわけです。」271-2P・・・・廣松さんはアドラツキー版を編輯し直すという形で、それに新メガで校正していくという手法を採っているようなのですが、直接新メガから編輯しなかった訳がここに書かれています。

三 基底稿と最終文形

「一般論といっても、次のようなことはくどくど申すつもりはありません。つまりマニュスクリプト(手書き原稿 manuscript)を読む場合には、書いたり消したり修正したりというテキストの成立過程が判るので刊本よりも理解が深まるし、しばしば最終文形からは想像もつかなかったような意味が浮かび上がってくるということ、とりわけ、手稿にあとの時点で加筆・修正がある場合には、その期間における著者の思想的進展を窺い知ることができ、思想の確立過程を追跡できるということ、——・・・・・・・・」274P

四 独仏年誌と『ドイツ・イデオロギー』

「マルクス・エンゲルスが『ド・イデ』を書くことにした動機は、大雑把に言えば、マックス・シュティルナーが『唯一者とその所有』のなかで『独仏年誌』の論文に批判を加えたのに反批判を書くこと、それからまた、ブルーノ・パウエルが「ルードヴィッヒ・フォイエルバッハの徳性描写」という論文のなかで、マルクス・エンゲルスの共著『神聖家族』に反批判を加えてきたのに応戦するということ、こういう論争にあったわけです。」278P

「そこで、彼らとしては、一方では『独仏年誌』の時代このかたすでに新しい知見に達していたのだということを言うと同時に、他方では、現時点ではそういう水準からもはや大

きく前進しているということを誇示しようともするわけです。実際問題として『独仏年誌』の時代にすでに……ということ余り強調しようものなら、論敵が居直って『独仏年誌』当時にはまだこういうフォイエルバッハ式の発想をしていたのではないかといって具体的な証拠を突きつけてこないともかぎらない。そういう自覚があるものですから、マルクス・エンゲルスの文章は非常に微妙な表現で、巧妙な論争文になっております。」 278-9P

「…………『ド・イデ』の論争的文脈で非常にデリケートな論点の一つが疎外論の取扱いです。この問題を理解し、連続性と不連続性を見定めるためには、シュティルナーがどういう論理でフォイエルバッハやその亜流を批判したか、マルクス・エンゲルスはそれに対してどういう論理構成で応戦しているか、大枠だけでも押さえておくことが先決要求になります。」 279P

五 望月理論について(上)

「望月氏は『ド・イデ』の第一篇には、二つの歴史理論が混在しないし並存していることを分析され、御存知の通り、それらをマルクスとエンゲルスとに振り当てられる。「分業展開史論」がマルクスで、「所有形態史論」がエンゲルスというシェーマになります。」 280P

「さて、それではマルクスとエンゲルスとの「持分」に関する望月氏の処理は正しいか？結論から先にいえば、文献学的次元でみても、『ド・イデ』第一篇の「持分」の処理に関しては、私は基本的な部面で望月氏の認定に賛成することはできません。／「持分」を区別することは勿論必要です。しかも、単に筆蹟だけで分別するのではなく、——筆蹟だけでいえば大部分がエンゲルスですが、清書稿の場合もあるわけですから——内容面なども勘案して弁別する必要がある。こういう作業を望月氏が試行されたことは、私とて高く評価します。しかしですよ、分業展開史論はマルクスという望月氏の認定は根拠薄弱というよりも、はっきり言って、非常に無理なのです。」 280-1P

「実際、氏は『現代の理論』(一二二号、三九ページ)での座談会などから判る通り、口実筆記説を採っておられるわけです。」 281P

六 望月理論について(下)

「私なりにマルクスとエンゲルスの——『ド・イデ』『ド・イデ』以前の時期の——著作や論稿を検討した結論では、内容面、つまり、論材や論点からいっても、氏のいわれる「分業展開史論」を含む部分(基底原稿の後半部)はやはりエンゲルスに帰属させるのがナチュラルだと思います。」 285P

七 物象化論への視点(上)

「柴田高好氏が提起された論点をはじめ、たしかに色々と問題があると思います。しかし、この国家論の問題は『ド・イデ』に即して議論する場合、マックス・シュティルナーの“無政府主義”思想との対決の文脈で考える必要があり、当然にまた、共産主義論といたしますか、革命論の問題とも併せて検討する必要があるわけです…………」 286P…………マックス・シュティルナー発の国家=幻想共同体規定をマルクスが展開していたことの押さえと、その後消失した問題の押さえ

「・・・・・・・・『ドイツ・イデオロギー』における疎外論の処理ということを理解するためには、とりわけマックス・シュティルナーとの関係を念頭におく必要があります。」

287P

「・・・・・・・・彼としてはあの「唯一者」つまり生身の個人の立場に立つわけで、実はフォイエルバッハ流の「人間」、「類的存在としての人間」なるものを神の別名にすぎないと言って批判し、そういう主体＝実体の自己疎外という想念を批判しているわけです。」

288P

「・・・・・・・・あれはものすごい皮肉なのです。つまり、シュティルナーは「人間」を批判して生身の個人たる唯一者の立場を云々しているけれども、そして「人間の自己疎外」を批判しているけれども、結局「創造的無」＝「唯一者」という名の「人間」の自己疎外ではないか。シュティルナーは生身の具体的な個々人に定位したつもりでいるけれども、実質的にはそれは全く抽象的な個人であり、所詮は抽象的な「人間」にすぎないではないか。こういう含みでの皮肉というか揶揄なのです。」 288P

「人間の「類的本質」に対してシュティルナーのように「個の実存」の立場を対置しただけでは、彼がフォイエルバッハに加えた批判、つまり、「神」に「人間」を対置したつもりでも「人間」とは結局「神」の別名にすぎないという批判の論理がはね返ってくる。／マルクス・エンゲルスはこのことを対自化し、ヘーゲル学派の疎外論の論理構制そのものを端的に超克しつつ、新しい地平、物象化論の地平を拓いているわけです。」 288-9P

八 物象化論への視点(下)

「ヘーゲル左派の展開過程を大雑把に言えば、フォイエルバッハまでのところで、神的な絶対精神が自己疎外して人間になるのではなく、逆に人間が自己の類的本質を疎外して神を定立するのだ、という逆転がおこなわれていたことは御存知の通りです。これに対して、ヘーゲル左派の掉尾(ちょうび)をかざるシュティルナーは、そういう逆転だけでは駄目だということ、何かしら普遍的な存在者である主体＝実体の自己疎外という論理そのものを止揚しなければならないということ、これを一応指摘したわけです。つまり、一応のところでは、シュティルナーの段階で疎外論の批判がおこなわれたことになります。／しかし、『ド・イデ』段階でのマルクス・エンゲルスはシュティルナーの遂行した主体概念の転換、つまり、類的＝普遍的な本質存在としての人間から個的＝実存としての人間＝個体への転換では駄目だといって批判するわけです。神＝幻像、「人間」＝真実在という定立に対して、「人間」＝幻像、「唯一者」＝真実在というシュティルナーの立論は、第三者的にみれば確かに新段階を意味します。が、普遍的・本質的存在を主体化してしまうヘーゲル学派に対して、特個的・実存的主体を実体化してしまうシュティルナーのやり方では、同じ地平に立った反対定立でしかない。類的本質の実体化と同時に個の実存の実体化をも批判的に斥けつつ、人間存在の事実態に即さねばならない。シェーマティッシュに言えば、そういう態度設定になると思います。」 289-90P

「尤も、ヘーゲル学派では、もともと、類と個、本質と実存とが固有の仕方で統一されて

いたわけですし、フョイエルバッハにせよシュティルナーにせよ、それなりに具象性をもたせて人間存在を考えているのですから、具体的・現実的な人間をとすることを押出しただけでは済まない。単に社会性を具体的に規定してみせただけでは、ヘーゲル学派の地平を超える所以には必ずしもなりません。まさに論理構制、いや、存在論的了解の構えそのものを一新する必要があるわけです。」 290P

「・・・・・・・・第三者的にみれば彼ら(マルクス・エンゲルス)はまさにそれを遂行することによってヘーゲル学派の地平を蟬脱したのであり、そのことにおいて、実は、近代哲学の地平を超える所以となったわけです。」 290P

「詳しい話は省きますけれどもヘーゲル左派の連中は、神にせよ、政治権力にせよ、貨幣の威力(財産の威力)にせよ、人間の本質力の疎外態ということで一応説明した。それに対して、シュティルナーになりますと、そういう「人間の本質」なるものがそもそも仮想的な存在なのであり、そういう主体的「本質」が自己疎外をおこすわけではない、という議論になる。が、一切合財を幻想・幻影とってきめつけただけでは、日常的意識にとって超人間的・超自然的な威力をもった存在として思念されているものの秘密を解いたことにはならない。ヘーゲル左派の連中が解こうとした問題そのものは残るわけで、シュティルナーの議論では課題の放棄でしかない。という次第で、エンゲルスとしては旧来の問題に対して疎外論とは別途の論理構制で答えようと試みた。／そこで、従来「人間」の「類的本質」という仕方で表象されていたところのものを——ヘスが既に「協働」とか「交通」とかいうことで把え返していたのを承けるかたちで——分業的協働に即して規定し直すことが、一つの鍵になったわけです。パリ時代までのマルクスは、社会的分業というものを私有財産制のもとにおける、類的自己活動の疎外態として了解しておりましたので、分業というものは疎外的な一結果として位置づけられていた。ところが、今や、分業という動態的な社会関係の方を説明原理としつつ、一方での「人間」的本質も他方での「唯一者」的実存をも定位し、ヘーゲル左派が「疎外態」ということで説明しようしていた問題の内実、つまり「神」「国家」「法」「財産」等々を新しい方式で究明してみせることになったわけです。」 290-1P・・・ヘスの協働概念と役割分掌の固定化としての分業と「共同幻想体」の現出

「具体的な経緯としては、シュティルナーが労働の自由化を云々したのに対して固定化された分業的労働そのものの止揚を対置するとか、シュティルナーが幻想共同体として国家を云々したのに対してその幻想的共同性の根拠を指摘してみせるとか、論争的な文脈で理解する必要があります。けれども……、またマルクスとエンゲルスとの微妙な差異といったことも分析する必要がありますけれども、当座の議論ではそこまで立入らなくてもいいでしょう。」 291-2P・・・シュティルナーの国家＝幻想共同体規定。分業によって「決定」から排除されることによって幻想共同体になるということ。

「ともあれ、『ド・イデ』ではヘーゲル左派および「真正社会主義」とのトータルな対質を通じて、疎外論がよって立つ主体＝実体の論理構制、さかのぼっていえば「主体—客体」

の論理構制そのものを超克しつつ、新しい世界観的地平が拓かれるに至っているということ、——詳しくは岩淵慶一氏への反批判(雑誌『情況』)で書き進めておりますが——私としてはこの次元に留目する次第です。」 292P

九 新編輯版の意義

「私自身に関していえば、『ド・イデ』の内容面についてはこれまで立入った議論を控えてきたのですが、それというのも、まずテキストを公刊したうえでないと、勝手なことを強弁していると疑われる危険を怖れたからなのです。……」 293P

「……私としてはこれで決定版だとは毛頭考えておりません。……私の試案だというのが自己規定です。」 293P

「しかし、人間のする作業ですから——至らない諸点は御叱正を得て是正していきたいと思います。／河出書房版によって、『ド・イデ』については従来見えなかったいろいろな事柄が見え易くなり、マルクス主義研究が新展開を遂げること、今は唯これを希うのみ、といった心境です。」 295P・・・廣松さんのこの編輯・訳に関していろいろ批判が寄せられているのですが、これが応答になると思います。これは、共時的・通時的協働作業なのだと思います。

【附】『ドイツ・イデオロギー』手稿復元版を編んで

とばしい正確な資料

「……マルクスの発表した著作はむしろわずかであって、彼の思想は膨大な遺稿やノートに埋もれている。従って、マルクスの思想的全体像を復元しようと思えば、遺稿やノートを研究することが是非とも必要である。」 296P・・・新MEGAとして世界的協働作業として進行中です。

手稿断片の扱いに問題

「だれが加筆……」も復元

「あえて一言を許されるならば、唯物史観ならびに共産主義理論の確立に際して、第一バイオリンをひいたのは、従来の通念とは逆に、むしろエンゲルスであったという筆者年来の主張が(拙著『エンゲルス論』および『マルクス主義の成立過程』参照)、このたびの刊本により認証されると思う。一部の論者たちが、エンゲルスの行文にとまどって持ち出した口述筆記説のごときは、手稿の状況をリアルに再現してみればとうてい維持できないはずであるからである。」 299P

たわしの読書メモ・・・ブログ 739 [廣松ノートⅡ— (5)]

・廣松渉『増補マルクス主義の成立過程』至誠堂 1984(下)

弁証法の唯物論的顛倒はいかにして可能であったか

この論稿は、「マルクス主義の成立過程」の押さえを通した「マルクス主義三部作」と規定したことで併せて、廣松理論の形成という内容にも結びつく内容になっています。

以下切り抜きメモです。なお、節に当たる括弧内漢数字の後の斜体文字は、わたしがつけたもの、著者自身がこの節にあたるセンテンスの中に節の標題的文を出してくれています。蛇足として消去しようかと思いましたが、学習ノートなので、そのままにしました。

「ヘーゲルとその学派における弁証法が“自己疎外の論理”と不可分であったことは、多言を要せぬであろう。いわゆる初期マルクスの論理もこの範にもれない。……／……後期マルクスの弁証法においては、自己疎外の論理を止揚しつつ、しかも弁証法の存立しうべき新しい地平が拓かれているからである。」 302P

(一) マルクスの唯物論的顛倒の前史

「この間の事情を知るためにも、ここではまず、唯物論的顛倒の前史を通観しておきたい。この前史は、それ自身また、三つの階梯に分けることができる。／第一は、学位論文と『ライン新聞』の時代を含む一八四〇～四二年。／第二は『経哲手稿』を頂点とする一八四三～四四年前半。／第三は『神聖家族』から『フォイエルバッハに関するテーゼ』『ドイツ・イデオロギー』を経て『哲学の貧困』にいたる一八四五～四七年である。」 303P

「第一の階梯、すなわち二十二歳から二十四歳にかけてのマルクスは、ベルリン・ヘーゲル左派の領袖ブルーノ・バウエルの思想的影響のもとに、ヘーゲル哲学の主体＝実体をなす「精神」を「自己意識」として解釈することによってヘーゲル弁証法をほぼそのままに容れる立場をとっていた。」 303P・・・廣松さんのその後の展開で言えば、顛倒というよりも観念論的・実体主義的疎外論批判になります。

(小さなポイントの但し書き)「この時期のマルクスは、弁証法そのものに関する主題的な討究を残してはいないが、彼の学位論文『デモクリトスとエピクロスとの自然哲学の差異』は、或る主体＝実体の自己対象化と自己回復という世界図式 **Weltschematismus** に俟っている。……エピクロスに関する言及……／……／……／マルクスは、こうして、ヘーゲルの意味での「具体的に普遍的な自己意識」としての自己意識の「絶対性と自由」を原理とすることによって、万有を解き明かす姿勢を示唆する。彼がエピクロスを自己否定せしめることによってとり出した「具体的普遍としての自己意識」、これがバウエル流に理解したヘーゲル哲学の主体たる「精神」であることは多言を要せぬであろう。但し、この際、学位論文——この標題はヘーゲルのいわゆる処女論文『フィヒテとシェリングとの哲学体系の差異』にちなんだものであろう——におけるマルクスが、ヘーゲルを単に拳々服膺(けんけんふくよう)することで必ずしも満足でなかったことは当時の関連文書(Vgl.a.a.O.S.79ff.)を援用するまでもなく、ヘーゲル『哲学史』でのストアの扱いや『精神現象学』における扱いとの差異によって窺うことができる。しかしともあれ、この時期のマルクスがヘーゲル弁証法そのものには疑念を抱くことなく、その襲用を図っていたことには疑いを容れないであろう。」 303・5P

「第二の階梯では、ヘーゲル弁証法の主体＝実体たる「精神」が「自己意識」にすぎないことに批判を向け、マルクスとしてはそれを“フォイエルバッハ的な”「人間」で置換することによって、自己疎外と自己獲得の論理＝弁証法を真に生かしめようと試みる。」 305P

(小さなポイントの但し書き)「一八四三年、前年の暮にバウエル派と決裂したマルクスは、ルーゲとの交わりを深め、ヘーゲル国法論を批判的に再検討するが、その際、ルーゲともかなりの交渉があったフォイエルバッハの影響を受け始める。この段階でのマルクスは、まだ唯物論 対 観念論というフォイエルバッハの主張には関心を示すことなく、もっぱら「ヘーゲル哲学における主語と述語との顛倒」という彼の指摘に学んでヘーゲルに立向う。／・・・・・・・・ヘーゲルにおいては、弁証法の拠って立つ主体＝実体、実体＝主体が主述顛倒しているがゆえに、その全体が逆立ちしていると云わねばならない。／マルクスは、しかし「外在態を自己のうちに取りもどす対象的な運動としての止揚」を「ヘーゲル弁証法の積極的な契機」として評価し、ヘーゲルが「人間の自己疎外、本質外化.....を自己獲得、本質変化.....として捉えている」ことを認め、この積極面を継承しようと図る。」

306P

「・・・・・・・・マルクスとしては、この主述顛倒を正置にもどして、「人間」を弁証法的運動の主体に据える。云うところの「人間」は、フォイエルバッハの自然的存在にしてしかも類的存在たる人間をモーゼス・ヘスに倣って、自己活動、社会的労働の主体として解釈(改釈)したものであって、マルクスはこの改釈によってフォイエルバッハの「人間」には欠如していた力動的能動的な主体性を確保し、「自然をもその非有機的身体とする」のこの主体＝実体に、自己疎外と自己獲得の弁証法的運動過程を担わされることができた。」

306P

「第三の階梯では、マルクスはヘーゲルとその学派の「思弁的構成」そのものの秘密を曝露し、前の階梯で主体＝実体として過程を担わせた「人間」に関しても批判(自己批判)をおこない、やがてはヘーゲル弁証法の論理そのものと相容れぬ立場に身を移す。すなわち、マルクスはここで一大旋回をとげ「ヘーゲル的方法の本質的性格」そのものを批判するに至る。」 307P

(小さなポイントの但し書き)「・・・・・・・・マルクスは、ヘーゲルも用いたことのある果物という恰好の例に即して、リンゴ、ナシ、等々の述語——リンゴは果物なり、ナシは果物なり——から独立の主語に転化された『果物』を取り上げ、この卑俗なるがゆえに辛辣な例をかざして「思弁的構成」を批判する。／バウエル派がヘーゲルの「精神」に置き換えて疎外の論理を担わせる主体＝実体、つまりバウエル派のいう意味での「自己意識」も『果物なるもの』にすぎない。／「バウエルにおいても——とマルクスは云う——自己意識は自己意識にまで高められた実体、あるいは実体としての自己意識であり、自己意識は人間の述語から独立の主語に転化されている。」 (a.a.O.S.146)。」 308P

「現にマルクスは『フォイエルバッハに関するテーゼ』(一八四五年春)を経て、エンゲルスとの共著『ドイツ・イデオロギー』を通じて自己疎外の論理そのものを放棄するに至る。この自己疎外の論理の放擲と相即して、翌年の『哲学の貧困』においては、ヘーゲル“垂流”のプルードンの弁証法——あらためて引証・対比するまでもなく、これはのちにマルクス自ら『経済学批判』序説では打ち出した「経済学の方法」と、大趣において一致している

—そのものが嘲笑の的にされたのであった。」 309P

(二) 後期マルクスの弁証法に至る展開

「後期マルクスの弁証法は、このような経緯を経てあらためて打ち出されたものであって、ヘーゲルとフォイエルバッハの直接的な媒介によって得られたものではない。それは“前史”におけるヘーゲル弁証法の論点そのものをも止揚することによってはじめて確立されたものである。／この間の事情を知り、後期マルクスの弁証法を理解するためには、マルクス自身が強調するヘーゲル弁証法との相違点に着目するのが好便である。／マルクスが彼自身の経済学の方法について論じた『経済学批判』序説における周知の条りでは次のように明言されている。後論との関係もあり、少々詳しく再録しておこう。」 309-10P

(小さなポイントの但し書き)「・・・『経済学批判』序説における周知の条り」(「上向法」と端初の設定問題での展開あり)・・・」 310-2P

「数々の論点を含んだ右の条り(引用した『経済学批判』序説における周知の条り)から、われわれは後論においても幾つかの論点を取り出す予定であるが、差当り、①学の方法としては具体的定在から抽象的な概念へと下向するのではなく、抽象から具体の上向法が採らるべきこと、②この上向の論理過程は、思惟にとっては具体的な対象、具体的概念の成立過程であっても、現実の歴史過程そのものとは必ずしも一致せず、論理過程と歴史過程との一致は事情如何による *ça dépend* であること、—論旨の基軸をなすこの二点に関して、これをヘーゲルが国民経済学の方法ならびに、彼自身の「法哲学」の方法を論じた条りと対照してみると、余りにも符節が合いすぎている事実に瞠目させられる。／マルクスとしては、しかし、ヘーゲルとの相違面として、「抽象的なものから具体的なものへ上向する方法は、.....具体的なものを精神的に具体的なもの *ein geistig Konkretes* として再生産する思惟のやり方であって、決して具体的なもの自身の成立過程ではない」ことを強調する。／これが『資本論』になると次のように表現される。」 312-3P

(小さなポイントの但し書き)「私の弁証法的方法は基盤に即していえば、ヘーゲルのそれと相違するばかりでなく、正反対のものである。ヘーゲルにとっては、彼が理念 *Idee* という名を付して自立的な主体に転化した思惟過程が、その外的現象たるにすぎぬ現実的なものの創造者である。私にあつては反対に理念的なもの *das Ideelle* は、人間の頭のなかで変換され翻訳された物質的なものにほかならない。—ヘーゲル弁証法の神秘的な側面については、三十年近くも前に、それがまだ流行していた時代に批判しておいた。」(*Das Kapital*. Nachwort (あとがき))。 313P

「ここにみる通り『神聖家族』における「思弁的構成」の批判—『果物』を自立的な主体に転化し、リンゴ、ナシ、等々を『果物』という理念の「現存様式」「変様」とすることによって諸々の「化体」を生み出す「創造行為」を批判した視角—が維持されており、「理念という名を付して自立的な主体に転化した思惟過程を.....現実的なものの創造者」とするヘーゲルの顛倒が指摘されている。「三十年近くも前に批判しておいた」というのも、『神聖家族』の当の条りを指すものにほかなるまい。／後期マルクスの弁証法は、し

かし、決して『神聖家族』時代の単純な延長線上にあるわけではない。・・・・・・」

313-4P

「果たして『資本論』では「商品」ないしは「価値」右の意味での『果物』の位置におき、遡っていえばヘーゲルの「精神」の位置におき、この実体＝主体の自己運動、これによる“有機的に分枝された序列”の自己定立として、抽象から具体へと上向していないか？ 商品という『果物』が貨幣や資本という“有機的に分枝された序列をなす諸果実”に至っていないか？ そして歴史性と論理性との一致がサ・デパン(ça dépend)とされえたのも、その限りにおいてはではないのか？／ナイン・ヤー・アーバー・ドッホ(ちがう・しかり・だが・しかし)である。この限りでは、後期マルクスの弁証法は『神聖家族』時代の発想の単純な延長線上にはなく、或る意味では『経哲手稿』当時の論理をも回復している。それはいかにしてであるか？ それはいかにして可能であったか？」 315P

(三) マルクスが唯名論的なとらえ方を止揚したこと

「この問題に答えるためには『神聖家族』や『ドイツ・イデオロギー』当時における極めて唯名論的な発想——つまり、普通は名目のみで、実在するのは経験的に認識されうる個々の事物だけだという考え方——が止揚されるに至ったこと、さりとて直ちに、普遍そのものが実在すると説く実念論が採られたのではなく、この唯名論 nominalism と実念論 realism との伝統的な対立を超える地平が拓かれるに至ったことを確認し、これと相即する「価値」の存在性格について検討しなければならない。／遺稿『経済学批判要綱』(一八五七～五八)によって知られる通り、マルクスは『経済学批判』を準備する過程で、経済学の出発点にも関わる例の“経済学におけるロビンソン物語”を検討し、諸個人から出発する立場——因みに『ドイツ・イデオロギー』では、マックス・シュティルナーの触発もあって、飲みかつ食わねばならぬ諸個人から出発していた——が必ずしも正鵠(せいこく)を得ていないことに気付く。・・・・・・もはやフォイエエルバッハの『人間』を批判するの余り或る意味では却って近世的個人主義の原理に攫(さら)われたシュティルナー・エンゲルス流の人間把握には盲従(ママ)できない。もっともここで直ちにノミナリズムが超えられたわけではない。しかし、おそらくやこのような省察を経ていたことも幸いして、同じくリカードを超えようとしたベイリーが採ったごとき価値ノミナリズムには、マルクスは陥らないで済んだ。(因みに、飲みかつ食わねばならない諸個人から出発する立場、ひいては『神聖家族』の件の発想をそのまま維持したとすれば、ベイリー流の価値ノミナリズムの方がはるかにナチュラルだった筈である！)。／しかも幸いなことには、古典派経済学にいう「価値」の存在性格そのものが、伝統的なノミナリズムとレアリズムとの対立を超えた地平を拓くのに恰好であった。商品ないし価値は、経済学の対象としての諸物件にはほとんど汎通的に妥当する「述語」である。だがそれは、例の『果物』とはある重大な点で赴きを異にする。『価値』は共同主観的(intersubjektiv)に一種の自体的・自立的な存在をもつものとして gelten している。」 315-7P

「「価値」は、商品生産が汎通的な社会にあつては、共同主観的・社会的に、一つの自立

的な対象性として、単に共同主観的な認識の対象としてではなく、現実 **gelten** している。それは社会的に **gültig** (有効) な、それ故に客観的な **Gedankenform** (思考形式) なのである。それは「抽象的人間労働の凝結体」として、この共同主観的な対象性認識の存在根拠をなす。／このようなものとして「価値」は、経済学的諸物件がそれとして **gelten** するところのエトヴァス (何か) として存在性をもつものであって、単なる自立化された述語ではない。人びとはしばしば、カントの百タール批判の水準における陥穽をメルクマールとして、マルクスの「価値」を形而上学的な実体だといって非難するが、それは右の事情を見落すことに由来する。マルクスの「価値」は、たしかに感性的な対象性、いわゆる **realitas** ではないが、だからといって形而上学的な **noumenon** ではなく、マルクスと相前後して H・ロツツェの「妥当」、西南学派などの「価値」、独逸学派の「数的存在」等々、さまざまな視角とコンテキストで追究された“第三領域”に属するもの、すなわち伝統的な感性体と悟性体、感性的経験界と形而上学の世界との二領域に対して新たに措定された“第三帝国”に属するものということができよう。しかもマルクスの「価値」概念は、その後の“ブルジョア哲学”の立てた第三帝国よりも優れた権能をもっており、マルクスはこの新しい 存在性格 をもった「価値」をアルケー (端初) とすることによって「資本論の弁証法」を転回することができた。」 318-9P

「けだしこの新しいアルケーは、ヘーゲルのごとき顛倒に陥ることなく、しかもヘーゲルの実体＝主体、主体＝実体としての「精神」がその体系のロゴスとして機能しえたのと類似の役割を果しうるのである。」 319P

(四) 後期マルクスの弁証法——『資本論』の弁証法

「今やわれわれは後期マルクスの弁証法——差当っては『資本論』の弁証法について、そこにおける“上向の論理”をヘーゲルとの対照において把えることができる。」 319P

「ヘーゲルの哲学においては、ある究極的な主語——それは差当っては、絶対者とも、真なるものとも、明示的には云うべからざるエトヴァス (something) たるにすぎないのだが——そして終始一貫して主語の位置に立ちつづける或る主語が、論理的展開の支柱になっている。」 321P

「……………主語化された述語は、その実、形而上学的な実体ではなく、**Geltung** としての存在性格、“第三帝国”に属するものとしての存在性格をもつ。ヘーゲルはこの点について知らなかったというよりも、文字通りに述語の主語化＝実体化をおこない、しかもこの実体を自己運動の権能をもつ主体として措定した。その限りでは『神聖家族』における思弁的構成の批判は当たっている。がしかし、主語に繰り込まれた述語は、ヘーゲルがいかにも誤想したにもせよ、実際には伝統的な感性体と悟性体とのいずれにも属せぬ第三領域の **Geltung** である。この限りでは、「価値」の存在性格に即して“実証主義的”ノミナリズム的な水準を超えたマルクスにとっても、述語の重層的な主語化は今や容認しうる論理の構造である。」 322P

「ヘーゲルは、述語の主語化に基づいてではあったが、ともかく期せずして上述の連続命

題措定の意味論的重層構造に依拠しつつ、弁証法的展開の舞台まわしを遂行しえたのであったのであった。そのうち、特に銘記すべきは次の三点である。／第一に、或るもの(主語)はしかじか(述語)なりという命題(判断)を立てるとき、ヘーゲル式に言えば、「対象にあれこれの述語を帰するのはわれわれの主観的行為ではなく、われわれは対象をその概念によって定立されている規定態において考察するので」あって、主語で指示されるところの或るものは当の述語の規定性において即自対自的になる。判断は、かのミダス王、その手にふれるものを直ちに黄金に変えてしまうミダス王のタッチに似て、主語対象をその述語規定性において即自対自的たらしめずにはおかない。」 323P

「第二に、究極的な、そして終始一貫せる真の主語が、存在者の全体を外延としうる汎神論的な絶対者であることに負うて、述語がこれまた存在者の全体にかかわる場合には、ある概念Bとその矛盾概念C述語とする二つの命題(AはBなり、と、AはCなり)を共に止揚することができる。・・・・・・」 324P

「第三に、述語が存在者の一部にしか妥当しない場合にも、その述語が次々に主語に繰り込まれることによって、すなわち、先の「ここに咲いている小さい白い.....花」というように、主語が次々と豊富化される。実体としての主体たるこの主語は、その過程を通じて“それでありつつしかも最早それに非ざるもの”として措定されていく。ヘーゲルはこの手続きによって無規定的・抽象的な端初から具体的な全体としての終局、彼のいう具体的概念 *der konkrete Begriff* へと上向することができた。」 324-5P

「マルクスが踏襲しえたのも、まさしくこの論理である。『神聖家族』当時のマルクスであったならば、述語を主語に繰り込んだ商品——しかも、単なる可感的使用価値物ではなく、原理上非可感的な「価値」を主語に繰り込んだところの！——商品を究極的な、一貫せる主語に立てることは出来なかったであろう。当時のマルクスにとっては、それこそ『果物』の主語化であり、笑うべき思弁的構成であったろう。」 325P

「しかるに前節でみたごとく、伝統的な感性体・悟性体を超える *Geltung* として「価値」を把握しえたマルクスにとっては、ヘーゲルのごとき述語の実体化に陥ることなく、いまや同一構造の論理を採ることができる。これを具現したもの、それがマルクス経済学の論理展開であった。」 325P

「学としての経済学の展開においては、貨幣は商品である。資本も商品である、と言う類いの下向は問題にならない。端的に、究極的な、しかも体系を一貫する真の主語から始め、商品はしかじかであることが措定される。マルクスの場合には、しかし、主語はつねに必ずしもヘーゲル的な全称(単称の絶対者)ではなく、特称たりうる。マルクスは、商品はしかじかであるという命題の述語を次々に主語に繰り込んで、或るしかじかの商品は貨幣である、或るかくかくの商品は資本である、というように、具体的・現実的な場面で主語の重層的な具体化を遂行しうる。」 325P

「マルクスの経済学が「抽象的概念」から出発して、「精神的に具体的なものの再生産」を遂行しうるのは如上のメカニズムによるものであって、「精神的に具体的なもの」 *ein*

geistig Konkretes の再生産とは、決して、卵—毛虫—蝶といった事象の記憶的再生ではなく、一般に、自然ないし社会の歴史的運動からの直接的な抽象、その追認ではない。抽象的普遍から具体的個別への上向は、単純から複雑への幾何学的・力学的な構成——これは所詮、特殊から特殊への推転にすぎぬ——でもない。『序説』からあらためて引用すれば、「意識にとっては諸範疇の運動が現実の生産行為として現われるのであり、その結果が世界なのである。具体的な総体は、思考された総体としては……概念作用の産物である……それは直観や表象の概念への加工の産物である」。しかれば、この加工、直観や表象の概念への加工はいかにしておこなわれるのであるか？ それは判断・賓述を通じて、「混沌たる表象」を「諸規定の総括」において措定していくこと、これを措いて他でありえないことは絮言するまでもあるまい。けだし歴史性と論理性とが必ずしも一致せず ça dépend たる所以でもあるが、上向の論理は、構造的にはもっぱら、先に述べた賓述における主辞の重層的具體化にもとづいている。」 325-6P

(小さなポイントの但し書き)「けだし、主辞の重層的具體化の論理を採ることによって、(1)伝統的な“方法”“手続”が、具体的定在を抽象的一般的な概念、ヘーゲルの謂う *Gemeinsachtlichliches* へと稀薄化するのに対して、具体的定在を「多様な諸規定の総括」において措定し、(2)しかも、いわば単細胞生物から哺乳類へと及ぶいわゆる進化系統図に定位し系列化するとき仕方で、(3)ベカントな具体的定在、つまり常識的な意味ではよく知っているものを、概念系列の連鎖と連環のうちに媒介的に関連づけ位置づけて、エアカント(学的に認識されたもの)たらしめつつ、(4)丁度メンデレーエフの周期律表においてしかるがごとく、規定を遺漏なく正則的に累加していくことによって、それを発見的方法としても機能せしめつつ、ベグライフェン(概念的に把握)された具体的な諸定在を学的に系統化することができる。」 327P

「科学の方法としても優れたこの方途を採ることにおいて、『資本論』に顕われたマルクスの弁証法的展開はヘーゲル弁証法と構造的に一致しうるのである。」 327P・・・絶対精神の自己展開・自己疎外としての存在論と認識論と論理学の三位一体的展開とマルクス弁証法が「一致しうる」？

(五) ヘーゲルとマルクスとの相違に目を向け、唯物論的顛倒の内実を追認する

「…………弁証法はもとより単なる上向の論理に局限されるものではない。弁証法の論理一般を射程に収めるためにも、ここでは一步進めて、ヘーゲルとマルクスとの相違面に目を向け、唯物論的顛倒の内実を追認することにしたい。」 328P

「…………ヘーゲルの神は、これら諸々のイデーとその化体をはなれて自存するものではなく、神とはこれらの総体にほかならないのである。ヘーゲルの汎神論的なヌース・精神・神は、いわば原始神話のマヤのように、様々な姿に化けて、万有に遍在する。『エンチクロペディー』における第一部論理学から第二部自然哲学への移行行きにドラスチックに現われる通り、ヘーゲルにあってはイデーが化肉して自然物となるのである。抽象から具体への上向とは、ヘーゲルの場合、まさしく如上の実体＝主体の自己疎外(化体・肉化)

と回復の運動を通じて、主体＝実体が自己を具体化していくプロセスにはかならず、それは文字通りに具体物の生成である。いわゆるヘーゲルの弁証法の法則は、このプロセスは、このプロセスのパターンを図式化したものにほかならない。」 328-9P

「一方、マルクスにおいては、初期にこそ疎外の論理で社会的諸形象の生成とその自己止揚を説こうとしたが、後期においてはヘーゲルが中世の“実体形相”とも相通じるごとき如上の発想によってはじめて——近世科学の要素主義的・機械論的な発想とはおよそ異質の論理として——拓きえた弁証法のロジックを、実体＝主体の自己疎外という形而上学的な想念を抜きにして継承しようと図る。そして実は、ヘーゲル弁証法のイデアリスムスの顛倒とは、現実の諸定在をば主体＝実体＝イデーの自己疎外態とみることが顛倒であることの謂いにはかならない。マルクスの立場からすれば、ヘーゲルは「理念という名を付して思惟過程を自立的な主体に転化し、現実的なものの創造者たらしめている」。ヘーゲルのごとき観方は、人間の対象的活動、対象的活動、対象的認識活動からの抽象、これの投影であって「ヘーゲルの“創世紀”は主客顛倒している」。われわれは今ここでマルクス・エンゲルスのいうイデアリスムス・マテリアリスムスの語義そのものの考覈に立入ることはできないが、「イデアリズム・レアリズム」「唯心論・唯物論」の両対概念を混淆してロシア・マルクス主義が流布した誤解とは、それはおよそ趣きを異にする。マルクス・エンゲルスが初期以来一貫して用いている「ライプニッツ以来の語法」では、事象を依ってあらしめる存在性が、イデア・エイドスにあると観る理説(イデア主義)とマテリア・ヒュレー自身にあるとする理説(マテリア主義)との謂いであって、いわゆる主観的観念論ではなくヘーゲル哲学の如きこそがイデアリスムスの典型である。マルクスとしては現存する「地上的 *irdisch* な諸事象」そのものに存在性を帰属せしめ立場を執ることによってヘーゲルと対蹠的な立場に立つ。」 329-30P

「だがここにおいて一連の問題を生ずる。実体＝主体の自己定立、自己疎外をぬきにして果たして弁証法の論理が存立しうるか？(①) 弁証法的展開の起動力が失われはしないか？(②) さしあたりこれら二つの問題に答えねばなるまい。」 330P

「(①)前者について云えば、既にヘーゲルにおいても、実体＝主体が自己を疎外して何になるか、また如何に回復して、何になるか、これは地上的・経験的規定に依拠しており、これを前節で指摘した展開の論理に俟って舞台まわししているのが実情であって、彼がリアルな議論を展開しえたのはこの限りにおいてであった。すなわち、そもそもヘーゲルにおいても、彼の体系は「すべての牛を黒くする闇」を主語とする分析判断の系列ではなく、それ自体としては無規定的(規定以前的)な抽象的一般者を端初とする総合的判断の体系なのであるから、究境的な主語＝実体とその自己定立は、展開の論理そのものに対しては偶有的である。この故に、ヘーゲル流の主語＝実体を、別の汎通的な普遍的一般者で置換しても、展開の論理そのものは依然として存立しうる。そしてもし、否定の否定をはじめ、いわゆるヘーゲル弁証法の“法則”が展開の論理と必然的なつながりをもつとすれば、その限りでは、実体＝主体の疎外を抜きにしても、——当の領域において汎通的な普遍的一般

者主語としつつ、件の“重層的主語化の論理”が立てられうる限り——依然としてそれらは **gültig** なはずである。けだし『資本論』の弁証法を唯物弁証法一般に推及しうる所以でもある。」 330P

「**(2)**ところで展開の論理的メカニズム、構造は同じでありえても、そのものの起動力、動索は何であるのか？ ヘーゲルの場合には主語が同時に主体であることによって自己運動が可能であった。マルクスの場合は如何？ マルクスの場合にも、或る種の場面では歴史的・現実的な運動の追認として、主語の自己運動であるかのごとく扱いうる局面もある。しかし、事象そのものの歴史的運動に起動力を帰しうるのは、歴史性と論理性とが一致する限りにおいてであって、マルクスとしては『物質なるもの』の自己運動の追認に終始することは出来ない。「価値」の背後に人々の営為を立てたからといって同断である。歴史性と論理性とが常に必ずしも合致しない限り、体系の展開は、ヘーゲルが観望者 **Zuseher** の位置においた **für uns**(われわれにとって)というときの **wir**(われわれ)の資格における賓述、これによって **ein geistig Konkretes**(精神的に具体的なるもの)が再生産されることに懸(かけ)る。通常の論理的思念においては、主語対象は、それが経験的な実在であれ形而上学な実在であれ、賓述によっても不易だとされているが、前節で示唆した通り、賓述によって単に主語表象が心理的に変様するのではなく、第三領域の **Geltung** (妥当)たる主語対象性は、意味成体として変成する。しかも意味成体を **prägnieren**(懐胎)するものが **Gegenstand für uns**(われわれにとっての対象)なのであるから **wir** の賓述によって、マルクスがいう通り「精神的に具体的なもの」が生産されるのである。マルクスは、ヘーゲルが詐って観望者の建前をとらせた **wir** の立場をおいて賓述することによって、ヘーゲルが折角に立てながらも生かすことができなかった **bekannt-erkannt** の論理を回復し、自ら **der Erkennen-lassende**(認識主体)として、主語重層化の論理的メカニズムに則って、同時に読者の賓述でもあるところの体系的展開を遂行する。かくして、マルクスは、主語＝主体の自己定立というヘーゲルにおける仮象を、それを支える舞台まわしの論理を向自化することによって卻けつつ、抽象的普遍から具体的個別への重層的具体化の論理に俟って賓述の力動的進展を確保しえている、ということが出来よう。」 330-2P

「唯物弁証法の体系においては、ヘーゲル弁証法における存在・認識・論理の三位一体がいかんにして保証されうるか？ 存在の弁証法と認識の弁証法の関係如何？ いわゆる弁証法の“法則”ひいては弁証法的否定性と全体性の論理はいかにして権利づけられるか？ 問題はまさに今茲に始まる。ヘーゲル弁証法の唯物論的顛倒について最終的に論じるためには、右の一連の問題を前以って考覈しなければならない。われわれは、しかし、もはや立入るべき紙幅をもたない。」 332P

「本稿においては、以上、極めて不十分ながらも、マルクスにおけるヘーゲル弁証法との対質の前史を鳥瞰し(第一節)、この前史におけるヘーゲル批判の論点そのものの自己止揚を確認し(第二節)、マルクスが立てるに至った新しいアルケーの存在性格の指摘を経て(第三節)、ヘーゲル弁証法の展開の論理の検覈に即して上向法の論理構造にふれ(第四節)、ヘー

ーゲルにおける自己疎外の主体＝実体を、新しい存在性格のアルケーを主語に立てることによって換骨しつつ、いうところの **wir** を観望者から積極的な措定者となすという仕方（第五節）、マルクスがヘーゲル弁証法を“唯物論的に”顛倒しえた所以を一瞥してきた、憾みを遺しつつも、ここでは取り敢えず是を以って当面の責めをふさぎ、大方の叱正を仰ぐことにしたい。」 332P・・・顛倒ということよりも、**実体主義批判**が後の廣松さんの論攷の字句になっていったのではと、わたしは押さえています。

この後に、最後にもってきた各所に付された註が出てきます。わたしが気になって備忘録的に遺したい文だけ切り抜きます。

「(4)『経済学批判』序説における右の立論が或る意味では『経哲手稿』のヘーゲル批判と裏返しになっていることを看過できない。けだし『経哲手稿』では、ヘーゲルのいう疎外過程、対象世界の定立過程が結局は「意識の中での事件」にすぎないということが——単にヘーゲル疎外論の欠陥としてでなく——ヘーゲル弁証法そのものに関わる論点として批判されていたからである。」 334P

「(10)マルクス経済学においては、商品は使用価値である、商品は価値である、と措定されており、使用価値という因子をもつ、価値をもつというようには表現されていないこと、これは決して表現法の問題ではないことに留意したい。さもないと、「使用価値」と「価値」との「矛盾」も宙に浮いてしまう。弁証法的展開において、一見概念(矛盾概念)の自己運動のごとくみえる場合、実はこれら両概念が“同一の”主語に対する述語として相矛盾する命題(判断)をつくるのが、展開の論理をなしており、また述語規定が単なる概念としての概念ではなく、実体性をもった相矛盾する[それでいて統一的な]項をかたちづくるのも、述語概念が繰り込まれる主語の“実体性”に負うてである。」 335-6P

「(11)この点で、フォイエルバッハの指摘した神学的顛倒批判の論点がもとの形で回復・保持されたことを認めうるであろう。」 336P

「(12)この点で一見、エクシステンティアがエセンティアに先立つという立場にみえるが、一時期のノミナリズムを止揚して、もはや伝統的な **essentia**(本質)-**existentia**(実存)の二元対立を超える新しい立場にマルクスが立つに至ったことは既に示唆した通りである。」 336P

「(13)エンゲルス流の自然弁証法については暫く口をつぐむ。スターリン時代に編輯しなおされた現行版の遺稿『自然弁証法』はテキスト・クリティークをぬきにして閑説するとき悲喜劇をさけたいからである。」 336P・・・・・・『自然弁証法』の個別科学的論稿に関してのテキスト・クリティークということよりも、**弁証法を法則としてとらえる物象化・ヘーゲルへの先祖返りが問題となっているのではと、思えるのです。**

「(15)**wir** の賓述ということと「社会的に **gültig** な、それゆえに **objektive** な **Gedankenformen** (思想形態)」という **Geltung** としての“客観的な”存立との関係については、マルクス自身必ずしも明確には論じていない。また「賓述によって主語対象性が意味成体としても変成する」メカニズムについても——これはマルクスのいう意味での「表象

または直観の概念化」と不即不離の関係にある筈だが——明示的には説かれていない。これは優に一書を有するテーマであるから、本稿では立入ることができないが、拙稿「マルクス主義認識論のために」（『唯物論研究』第十五号）で示唆しておいた。[『マルクス主義の地平』に附論として収録]」 336P

「解説」 小林昌人(『廣松渉著作集第8巻「マルクス主義の成立過程」』1997 岩波書店所収)

『マルクス主義の成立過程』(以下『成立過程』と略記)は一九六八年六月に刊行された。廣松にとって最初の論文集である。そこには、六三年から六七年の間——著者の三〇年代前半の時期——に発表された諸論稿が収められた。どれも発表時すでに高い評価を得ていたものばかりである。それらが一著に編まれたことによって、またすぐ続けて初の書き下ろし『エンゲルス論』(本著作集第九巻)が公刊されたことも加わって、廣松の議論は一つの衝撃として迎えられることとなった。当時の書評(『エンゲルス論』に対するものも含む)がその雰囲気をよく伝えている。」 665P・・・後に、清水正徳、良知力、大井正、城塚登という当時の初期マルクス研究者の書評の引用

『成立過程』と『エンゲルス論』は、その歴史的・文献学的な討究における視野の広さと実証の緻密さで読む者を驚かせた。後の『マルクス主義の地平』や『マルクス主義の理路』(ともに本著作集第十巻)が“解釈的再構成”に属するのに対して、『成立過程』と『エンゲルス論』(本巻所収の『青年マルクス論』も)“歴史的再構成”に属し、実証的な手腕が遺憾なく発揮されている。しかし、どの書評もが着目している通り、これらは単なる実証主義的研究にとどまるものではなかった。「思想内容に深く食いこ」みつつ、「大胆な論壇」

「大胆な主張」が提起されているのである。議論の運びは“実証”を旨とし、“解釈”は努めて禁慾されている。それでいて、実証的叙述それ自身が単なるそれ以上の或るものを迸(ほとば)らせているのである。」 666-7P

一 廣松“初期マルクス論”の意想

二大陣営の対立を超えて

「初期のマルクスに対する格別な関心は一九三〇年代以降、とりわけ一九三二年にMEGA A(いわゆる旧メガ＝『マルクス・エンゲルス全集』)第I部第三巻で『経哲手稿』(「経済学・哲学手稿」が初めて公表されたのを機に俄然高まった。『経哲手稿』に見られる若きマルクスの人間主義と疎外論こそが「本来のマルクス」とされた。ソ連やコミンテルンが振りかざした「公認のマルクス」にとって代わるものとして、「本来のマルクス」が顕揚されたのであった。五六年のフルシチョフによる「スターリン批判」はこの流れをさらに加速した。人間主義的・疎外論的マルクス主義は、たしかに“正当派マルクス主義”に対する強烈なアンチ・テーゼであった。スターリン主義的“正当”の教義体系にあつては「客観的法則」が支配しており「主体的人間」が欠けている、との批判は、西欧や日本で多くの支持者を獲得した。“正当派”も応酬はした。「本来のマルクス」と称してマルクス主義を観念

論者にしたてている、未熟な時期のマルクスではなく成熟したマルクスに立脚すべきだ、云々。……」 667-8P

「廣松のこの分野での仕事は“正当派”と“非正当派”の二大陣営——“ロシア・マルクス主義”と“西欧マルクス主義”とも呼ぶ——に対する両刀批判として遂行されたものである。廣松のみるところ、二大陣営の争いは同一パラダイムの内部における相補的対立にすぎない。

「問題なのは、“ロシア・マルクス主義”が一面的に教条化した“解釈”では、マルクス主義が語の悪しき意味での“科学主義”の一典型に堕していること、そしてその補完物として絶えず“人間主義的解釈”が生み出されてはいるが、所詮はこの科学主義 対 人間主義の地平でしか、マルクス主義の世界観が理解されていないことである」（『マルクス主義の地平』、本著作集第十巻、一四頁）。……しかしマルクス主義は、——廣松が繰り返し力説したように——近代イデオロギーをトータルに超克する新地平を開示するものであって、科学主義・人間主義の二者撰択によっても、また当の対立が生じる次元内部での第三の途——アルチュセールや構造主義派——によっても、本諦を把握することは叶うべくもない。」

668P

「マルクス主義の思想的地平として廣松が見いだしたもの、それはマルクスとエンゲルスが疎外論の自己批判的超克によって拓いた地平にほかならない。」 669P

疎外論の超克と物象化論

「廣松における物象化論の“発見”は『成立過程』『エンゲルス論』を公刊(執筆ではない)した頃のことであるから、両著ではまだ明確な形で語られるには至っていない。『成立過程』の「選書版へのあとがき」で廣松はこう述べている。／(小さなポイントの但し書き)「著者は旧版を上梓した当時、マルクスの物象化論の論理構制ということをまだ対自化するに至っていなかった。……」(本巻五八七—五八八頁、増補単行本 337-8P)」 669P

「……むしろ、物象化論が明確に対自化されていないがゆえにかえって、ここでの議論は——物象化論の高みから疎外論を切って捨てるたぐいの手法は採りうべくもなく——初期マルクスの疎外論の意義と限界、マルクスによってそれが自己批判的に超克されざるをえなかった内的必然性と超克されえた根拠を、マルクスと同時代の諸思想に徹底して内在することを通して詳らかにするものとなっているからである。……そもそも物象化論は疎外論の対概念ではなく疎外論を止揚したものであるのだから、疎外論の意味やその中でのマルクスの葛藤・苦闘を抜きにしては物象化論の地平は対象化さるべくもない。……」 669-70P

「ここで人は、アルチュセールの名を想起するかもしれない。アルチュセールと廣松とはほぼ同時期に“第三の途”を模索し、マルクスにおける「初期」と「後期」の「切断」を説き、六〇年代から七〇年代にかけて多大な影響を及ぼした。たしかに、アルチュセールと廣松はいろいろな場面で重なり合う。しかし、アルチュセールには物象化という概念が存在しないこと、そしてまた“初期マルクス＝イデオロギー、後期マルクス＝科学”というアルチュセール式の「認識論的切断」説に対して、廣松は——「イデオロギー」と「科学」

についての了解内容が異なるのは勿論として——初期と後期の連続面をも認めつつパラダイム次元の転換を問題にしていること、少なくともこの二点は銘記しておかなくてはならない。……」 670P

二 実証的研究による復元的再構成

歴史的研究の意味と射程

「廣松“初期マルクス論”における実証的研究には。歴史的・思想史的それと文献学的なそれとが含まれる。後者については『ドイツ・イデオロギー』に即して見ることにして、ここでは前者について触れておこう。／廣松の研究はよい意味での歴史的方法に貫かれている。従来の初期マルクス研究においては、研究の前提的態度においてすでに一定の先入観ないし“結論”が設定されていた。“正当派”の場合には、民主主義から共産主義へ、観念論から唯物論へ、哲学から経済学へ、等の“発展図式”に沿って、細部の資料が後配された。“反正当派”の場合には、初期＝本来のマルクスの人間主義を復興するという目的に沿って、——後期マルクスも人間主義的に解釈するか後期は墮落なりと切って捨てるか、“人間”を実存主義的に解するか“階級的立場”に引き付けて解するか、等、細部ではバリエーションを伴いつつも——論者の関心に応じて現われる射映相が主体研究対象とされがちであった。もちろん廣松も、問題意識や目的を持って臨んでいるには違いないが、対象把握における歴史感覚はいうには及ばず、主観的“読み込み”に呈する自覚的・反省的な禁慾、そして歴史的研究と解釈的構成との方法論的な区別(むしろ連関の内なる区別)において、諸他の研究方法と決定的に区別される。／一例をとろう。従来の研究の多くは、初期マルクスの発展過程をヘーゲル—フォイエルバッハ—マルクスという単線的な行程で理解していた(“正当派”にとってはフォイエルバッハの唯物論が、“反正当派”にとってはフォイエルバッハの人間学が、恰好の媒介環となった)。廣松はこの前提的了解に異議を唱え、ヘスの介入という事実の重要性を明らかにした。それは一人ヘスの再評価といった“個別的事実の掘り起こし”を旨とする提題ではない。思想形成の途上にある若きマルクスを、当時の時代状況とそれを映し出すヘーゲル左派の総体的展開過程の中に正置する作業の一環なのである。／(小さなポイントの但し書き)「……(『成立過程』、本巻三〇二—三〇三頁、増補単行本 6P)。」 671-2P

「実際、ヘーゲル左派のダイナミックな展開を視野に収めることによって、廣松は、例えば「疎外」や「人間」といった基幹的な術語が当時いかなる概念として、またどのような含意で使用されていたか、それをめぐっていかなる論争がたたかわされていたか、を詳らかにし、そこからマルクスを逆に照射することに成功している。ヘーゲル左派からの照り返しを承けることによって、影に覆われていた部面が輝き出で、マルクスのテキストがこれまでとはまったく異なる姿で立ち現われてきたのである。今でこそこうした研究方法が思想史研究に定着しつつあるとはいえ、廣松が一連の論著を発表した当時には、この常道に就いた初期マルクス研究は数えるほどしか存在しなかった。初期マルクスを歴史的・思想史の対象——イデオロギー的先入観から解放された学問的对象——として据えたことは、

廣松の先駆的業績として記録すべきであろう。」 672P

「廣松“初期マルクス論”の意義は、しかし、実証的研究とその成果で尽くされるものではない。もし歴史的研究に徹するのであれば、例えばヘスの議論を発掘してマルクスとの異同を摘録するにとどめ、それによってマルクス像がどう変わるかということは余人に委ねるのが、筋というものかもしれない廣松の場合、これとは逆に、“歴史家の仕事”はあくまでも主題展開のための予備作業である。／(小さなポイントの但し書き)「・・・・・・・・(『成立過程』、本巻二九七頁、増補単行本「旧版への序文」)。」 672-3P・・・廣松さんが『ドイツ・イデオロギー』の編輯・訳の「アムステルダム行き」でまでしなかったのは、「あくまでも主題展開のための予備作業」ということにもあったのでは？

「従来の解釈に独自の解釈を対置するだけでは“天上の争い”になりかねない。歴史的・実証的な「復元」は、事実問題に対する無知や誤認にもとづく諸他の解釈を実証のレベルで棄却する——そのことによって、「継承的發展」に資しうるものを選び分ける——意味をもち、同時に自らの解釈の根拠づけとしての意味をもつ。「結局は捷徑」といわれる所以である。」 673P

「晩年、廣松は小阪修平のインタビューに応じて次のように述べている。／(小さなポイントの但し書き)「・・・・・・・・ぼくの研究論文での議論の運びでは、その時代のこういう歴史的条件の中で、周りにはほとんど同じことを言っている奴がいくらでもいて、その中で、マルクスやエンゲルスが言っていることのオリジナリティというのは、強いて言えば、百のうちのはほとんど一かそこいらだ。ところが、その一があるかどうかで理論が大きく変わるのでそれが重要だ、というような書き方をしたとは言えるかもしれません。そういう議論ができる程度には、真面目に勉強したんですよ(「物理学のパラダイム・チェンジを世界観へ」、『別冊宝島』一六七号、九二年一二月)。」 671-2P・・・共時的・通時的協働連関の中での個々の主体性のもつ意味

エンゲルス主導説の提唱

「「従来の研究では、マルクスとエンゲルスとを一体に扱うの余り、エンゲルスの独創性が看過されてはいないであろうか。従ってまた、マルクス主義の成立に際してエンゲルスの果たした役割が、過少に評価されてはいないであろうか」。廣松は『成立過程』に収録された六六年の論文「初期エンゲルスの思想形成」(これは『エンゲルス論』の原型をなす)で、こう問い、そして断じた。・・・・・・・・」 674-5P・・・現在の運動的観点からする総括問題としては、反差別論的観点からする「マルクス・レーニン主義の陥穽」というところで、晩期マルクスの転回とエンゲルスの「ヘーゲルへの先祖返り」というとらえ方において、マルクス・エンゲルスではなく、その違いのとらえ返しからする「マルクス／エンゲルス」としてとらえかえすところで、むしろ重要な問題になっているのではないかとわたしは(も)とらえ返しています。

「廣松は初期エンゲルスを独自の研究対象として措定した。まずこのことの意義が銘記されねばならない。従来、そもそもエンゲルスが独自の研究対象とされることは決して多く

なかった。伝記類や生誕何年といった記念出版の類いを別にすれば、エンゲルスはマルクスの一体の存在として、あるいは単なるマルクスの協力者、脇役として、遇されてきた。なるほど、後期エンゲルスについてはその政治論や軍事論、『自然弁証法』などの個々のテーマに関する研究がなかったわけではない。しかし、初期エンゲルスについては——杉原四郎の先駆的研究のような少数の例外を除けば——ほとんど見るべき研究は存在しなかった。」 675P

「こうした状況は、“正当派”と“反正当派”の対立構造と無縁ではなかったろう。“正当派”は「マルクス・エンゲルス一体説」をとっていたし、そもそも初期マルクスにすら大きな関心を払わなかったのだから、初期エンゲルスの独自の研究に及ぶ積極的な契機を欠いていた。“反正当派”は主として「哲学」の場面で“正当派”に対抗したから、“正当派”がその哲学体系において依拠した後期エンゲルスの所論（実際にはそれを歪曲し通俗化したもの）に批判の矛先を向け、“後期エンゲルス”に“初期マルクス”を対置することになった。初期エンゲルスがそもそも関心の的にならなかった所以である。両陣営のいずれもが、初期エンゲルスをブラック・ボックスに収めたまま、種々の解釈論争を展開してきたのであった。廣松は「一体説」「対立説」いずれにも堕す異なく、初期の、つまり思想形成過程における——それゆえ多分に単なる行程を辿った！——マルクスとエンゲルスのそれぞれを、歴史的に復元しようとした。これは従来の研究史上における重大な、そして基礎的な部面での空白を埋める作業であった。」 676P

「・・・・・・・・廣松がこの作業に精力を注いだのは、「和音の両音素を一たん解析して聴くことが、全体としての「マルクス主義」をより十全に理解するための一助となるからであり、「自己疎外論」の去就、「資本論の弁証法と自然弁証法」、「歴史的法則と人間の自由」等々、解釈上異説を生じている問題などは、両音素の解釈をぬきにしては解きたい謎を残す」からである(本巻三六七頁、増補単行本 81P)・・・・・・・・」 676P

三 『ドイツ・イデオロギー』の研究

文献学的研究と新編輯版

「廣松の初期マルクス・エンゲルス研究における白眉をなすものが、『ドイツ・イデオロギー』の研究と廣松独自の新編輯版である。「現行版『ドイツ・イデオロギー』は事実上偽書に等しい」という衝撃的な書き出しで始まる論文「『ドイツ・イデオロギー』編輯の問題点」が『唯物論研究』に発表されたのは六五年三月であった。その年の秋にはソ連で新編集版が発表され(バガトゥーリヤ版)、翌年には東独新版も現われるに及んで、『ドイツ・イデオロギー』の編集問題はにわかに議論的となったが、その最初の一撃を放ったのが廣松だったのである。」 677P

「・・・・・・・・『ドイツ・イデオロギー』の編集問題の特別な意味とは、この著作の「格別な資料価値」に関わる。『ドイツ・イデオロギー』は、そこにおいて初めて世界観としての(単なる理論ではなく)唯物史観が確立した著作であり、しかもエンゲルスとマルクスそれぞれに膨大な添削・推敲の跡が残されている。「もし編輯が正鵠を得るならば、

①……思想形成の進行状況、唯物史観の確立過程を追認することができ、②……兩人各々の果たした役割と持分をクローズ・アップできる。また、③当時における唯物史観の構想を窺うと同時に、『ドイツ・イデオロギー』を転換点とする自己疎外論の遷移を全体的な構想との関連で知ることができる。けだし、①②③を可能ならしめる形に——ということはすなわち、この草稿の特異性に由来する特殊格別な資料価値を生かしめる形に——十全の配慮を以って編集することが必要となる所以である」（『成立過程』、本巻四〇九—四一〇頁、増補単行本 128-9P）。言い換えれば、編集次第では、この著作は雑然たる断片集（リチャゾフ版）にも、恣意的な“体系的著作”（アドラツキー版）にもなりうるし、逆に「格別な資料価値」が浮かび上がるものともなりうるのである。この意味において『ドイツ・イデオロギー』の編集問題は格別な重要性をもつ。」 677-8P

「……………廣松が「編輯に問題点があることに気付」いたのは五九年に「理論集団」で輪読したさいのことであり、「“自家用版”を準備した」のは六〇年であった（本巻四二六頁、増補単行本 147P）。「理論集団というのは、東大の大学院生を中心とした第一次ブントの“外郭団体”で、その後廣松はブントの機関誌『共産主義』に『ドイツ・イデオロギー』編集問題に関する論文を寄稿する約束もしている……………「一見アカデミックな文章をどうしてそういう場にも書いてもいいという気になったか」を、廣松は「マルクス主義の原像の復元」と題するインタビューで語っている。／（小さなポイントの但し書き）「スターリン主義は間違っているということまでは皆が一応はいうけれども、一体どこが駄目なのかという点では必ずしもはっきりむしない、というのが当時の状況だったわけで、スターリン主義というのはマルクス・エンゲルスの文献までも歪曲してしまっているという事実をバクロし、スターリン主義的な歪曲をテキストにまでさかのぼって是正するところから始めざるをえなかったわけです……………」」（『日本読書新聞』七二年一月二四号）。」 678-9P

「廣松文献学は、テキストの内容と実践的関心とに分かちがたく結び合わされているのである。もちろん、文献学の領域でも、歴史的実証の場合と同様“主観的認定”に対する自覚的な禁慾があり、廣松の議論の運びは実に手堅い。具体的に例示する紙幅を欠くがバガトゥーリヤや新MEGA版『ドイツ・イデオロギー』を編集集中の責任者タウベルト（新MEGA試行版『ドイツ・イデオロギー』も彼女の編集）などの議論がしばしば、しかも決定的な点で、思い付きと事実とを無自覚的に混淆していることと比較しても、廣松の優位性には歴然たるものがある……………廣松の研究とその結実たる廣松版は、今日でも国際的な最高水準に位している。もちろん廣松版は『ドイツ・イデオロギー』の手稿オリジナルに直接あたったものではないから、細部の個々の点では不備があることは否めない（渋谷正「『ドイツ・イデオロギー』の編集問題」、『経済』九六年六月号参照。なお、未発表であるが、山中隆次も草稿を直接調べて廣松版を是正した“私家版”を作成している）。廣松自身が、廣松版を「叩き台の一つ」「試案」として「自己規定」しているのであるから（『成立過程』増補版、本巻五五一頁、増補単行本 293P）、オリジナルの調査に基づく新知見は、

それが廣松版の不備を指摘するものであればなおさら、廣松の歓迎するところであろう。」
679P・・・そもそもマルクス関係の研究者は、相互批判の中で、マルクス派の研究を共時的・通時的協働としておこなうのであるし、理論の試論性に鑑みても、自らの成果を突き出し過ぎるのは如何なるものかと、思わざるをえないのです。さらに、廣松さんにとって、自らの名を冠した理論を生み出していく、ひとつのステップとしてあり、その後の『ド・イデ』研究は、それに特化した研究を進めるひとに任さざるをえないという事情もあったのです。

「廣松の提起した『ドイツ・イデオロギー』の編集問題は、「組版問題」と「配列問題」の二つに大別することができる。「組版問題」と呼ぶのは、抹消文をアドラツキー版や新MEGA試行版のように巻末や付録に一括するのではなく、本文テキスト中に然るべき方途で組込むこと、エンゲルスの追補やマルクスの加筆は書体を区別して印刷することで添削過程が一目瞭然となるよう工夫すること、等の問題である。これは現在進行中の新MEGA版『ドイツ・イデオロギー』でもまったく考慮されていない問題で、廣松版の方式はそれを実見した研究者に広く支持され、現在、鄭文吉(韓国)や日本の研究者たちが新MEGAでも採用するよう主張するところとなっている。「配列問題」と呼ぶのは、エンゲルスとマルクスによる番号付けに“飛躍”のあるものや、番号付け自体を欠くものを、どのように配列するかという問題である。・・・・・・試行版の配列は、その立案者(タウベルト)自身によって最近否定された。新MEGA本巻(第I部第五巻)に『ドイツ・イデオロギー』を収録するにあたっての国際会議が昨年(九六年)一〇月に催されたさい、タウベルトは配列を全面的に一新した新編集プランを提出したのである(新プランに対しては鄭と小林が批判的意見を同会議に提出している)。試行版の編集が編者当人によってすら維持されなくなったことは特筆に値しよう。“最新”の研究状況に照らしても、廣松版は「配列問題」においても独自の、そして高度な成果たる意義を失っていない。むしろ、改めて再評価さるべきものといってよい。」679-81P

文献学から内容討究へ

「・・・・・・廣松版『ドイツ・イデオロギー』は七四年六月に河出書房新社から刊行された。以後、廣松の研究は新段階に入る。『ド・イデ』と自己疎外論の超克——岩淵慶一氏の御批判にも応えて」(『情況』七四年七月号—七五年一・二月合併号、『廣松涉コレクション』第三巻所収)、「望月清司誌の『ド・イデ』論をめぐって」(『情況』七四年一二月号)で、それまでの論争に“決着”をつけるとともに、『ドイツ・イデオロギー』の国家論(『国家論研究』第五号、七四年一二月、本著作集十一巻所収)では国家論に即して具体的な「廣松『ド・イデ』論」を展開、さらに「『ドイツ・イデオロギー』とその背景——文献学的研究から内容的討究への架橋のために」(『知の考古学』七五年第一号＝四月—第三号＝八月、本巻所収)では、『ドイツ・イデオロギー』執筆を動機づけた論争的背景を詳らかにしながら、『ドイツ・イデオロギー』の論脈と執筆姿勢を浮かび上がらせている。」681P

「・・・・・・さらに廣松は、マルクスに対するユリウスの批判——マルクスの「人間」

は「類」と「個」の二元論を止揚しないという——なども配視しつつ、総じてヘーゲル左派論争の全体像の中で、マルクス・エンゲルスが「フォイエールバッハ垂流」と見做された所以やその意味を検討し、諸論争の中であらわになったヘーゲル左派的思想圏の問題構制がマルクス・エンゲルスに深刻な反省を迫ることとなった次第を辿り、それがいかなる問題を彼らに課すことになったか、また『ドイツ・イデオロギー』が当の課題にいかに応えているかを、明らかにしていく。まさに「文献学的研究から内容的討究への架橋」である。」 682-3P

『ドイツ・イデオロギー』の「内容面についての解釈や見解」の表明は、これで終わりではない。“『ドイツ・イデオロギー』論」という形式においてではなく、「解釈的再構成」として展開されていくのである。端的な一例が『物象化論の構図』であろう。その第Ⅰ論文「唯物史観の宣揚の為に」は、「マルクス・エンゲルスが人間の「本質」と「実存」をめぐる問題を介して「人間主義」を超克しつつ新しい境地を拓いたこと、——それは、存在論一般の次元で抽象化していえば、ヨーロッパに伝統的な「実体主義」的存在観から「関係主義」的存在観への転換に通ずること」を論じ、さらに「マルクス・エンゲルスが、「実体＝主体」の自己外化と自己獲得という「疎外論」の構制を自己批判的に止揚する旋回と相即的に、近代哲学流の「主—客」図式の拠って立つ地平そのものを決定的に超克しつつ、社会・歴史理論の新しいパラダイムを提出するに至った経緯、このことを「物象化論」の定位を兼ねて追認して」いくものとなっている(本著作集第十三巻、五六頁)。これは視角を変えれば、廣松哲学の視座からする“『ドイツ・イデオロギー』論”とも言いえよう。」 683P

「廣松の歴史実証的な研究は“歴史的再構成”であって、無味乾燥な個別的事実の発掘ではなかった。それは内容的“解釈”と不即不離の作業であった。文献と解釈との、過去と現在との、マルクスとわれわれとの、絶えずの行き交う交互運動の律動が、そこにはある。この律動が実証的研究を貫くことによって、無機的ともみえる実証の世界からそれを超える響きが聞こえてくるのである。冒頭に掲げた書評の中で大井正は、『エンゲルス論』の出版社が「この本とスチューデント・パワーとを結びつけようとしているのではないか」とも書き、それが「実現されうるとするならば、著者がもっているような、マルクス主義への歴史的考察にその結果としてのマルクス主義解釈が、現在のスチューデント・パワーに流入していくことによってであろう」と予想していた。時あたかも、学生運動は沈滞期から新たな胎動に向かいつつあった。翌六九年一月の東大安田闘争を機にそれは一気に噴出し、“激動の時代”に突入していく、激動の時代は、思想的には同時に“模索の時代”でもあった。廣松の著書は広範な読者に迎えられていくことになる。完成されたマルクス像の教条ではなく、マルクスとエンゲルスの生々しい思想形成に立ち返り、そこから自らの新たな思想形成の道標を見いだそうとした人々の志向と響き合うものを、廣松の“成立史的研究”が含んでいたからであろう。歴史的復元のための資料的素材のみならず、想像のための示唆に溢れていたからであろう。翻って、廣松の著書が時代に迎えられ、時代に応答しえた

所以がここにあるとすれば、三〇年近くを経た今日においても、われわれは新たな時代の文脈において、ここから再び新しきものを汲み取ることができるのではないか？ しっかり、そして、そうすることが、廣松がマルクスを読んだように、われわれが廣松を読むことにも通ずるように思われる。」 683-4P